

第2節 カネノトイ遺跡1次調査区

1 調査の概要

カネノトイ遺跡が位置する微高地の北側緩斜面に1次・2次調査区とも位置するが、1次調査区は微高地縁辺にあたり、1次調査区の北側は低地部となり、遺跡の範囲は途切れる。

発掘調査は便宜上、北区と南区に分け、切り返しを行い実施し、最後にその間の残地の調査を行った。調査の結果、多数の柱穴のほか、土坑や溝、掘立柱建物、棚列、竪穴建物等の遺構群が確認できた(第132図)。このほかに風倒木痕も検出されたが、これらの風倒木痕の上からすべての遺構が切り込まれているため、古墳時代以前のある時期には、森林景観を呈していたことがうかがえる。

これらの遺構群について、以下で詳細を述べる。

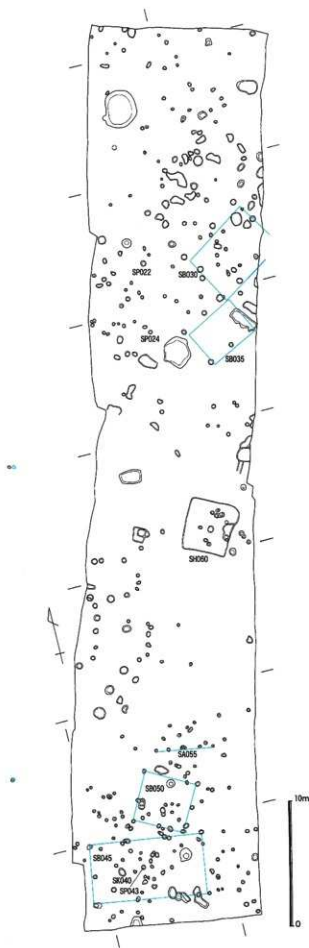
2 遺構と遺物

(1) 竪穴建物跡

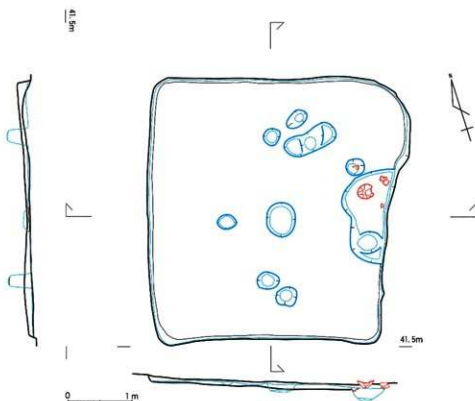
調査区の中央付近で竪穴建物跡が1基検出できた。床面までの残りは浅く、また、このような竪穴建物跡が単独で営まれていたことは考えにくい。周辺にも竪穴建物跡が存在しており、今回、検出されたビット群の中には竪穴建物跡の主柱穴であったものもあったであろう。

SH060 (第132・133図、写真図版39)

調査区の中央付近において検出された東西350～410cm、南北400～410cmを測る方形建物である。主柱穴は2本であり、主柱穴間に径45～55cm、深さ10cmの土坑をもつ。この土坑中から特筆すべき炭や焼土の出土はみられなかった。主柱穴に近接して西側のやや外側には主柱穴と同規模の柱穴が検出でき、住居の建て替えに伴うか、あるいは主柱穴の補助であるか、判断ができなかった。東壁の中央には東西70cm、南北140cm、深さ20cmを測る土坑が掘られており、土坑内から比較的まとまった土器器が出土している。この土坑の両側に深さ35～40cmの2基のビットが土坑内に1基あるものの、対になって存在する状況で検出できた。



第132図 カネノトイ遺跡1次調査区遺構配置図 (1/300)



第133図 カネノイ遺跡1次調査区SH060 (1/60)

出土遺物は第134図に示した。1は土師器甕である。復元口径10.1cm、胴部最大径20.7cmを測る。口縁は内湾しながら直立し、胴部最大部が中央付近にある形態をもつ。胴部の調整は外面に刷毛目、内面にへら削り後にナデを施している。2は土師器壺であろうか。胴部外面には刷毛目の上からへらミガキが、内面にはへら状工具によるナデがそれぞれ施されている。外面の胴部最大径付近には突帯がめぐられ、竹管状の刺突が施されている。3は土師器甕である。内外面に刷毛目が施されている。

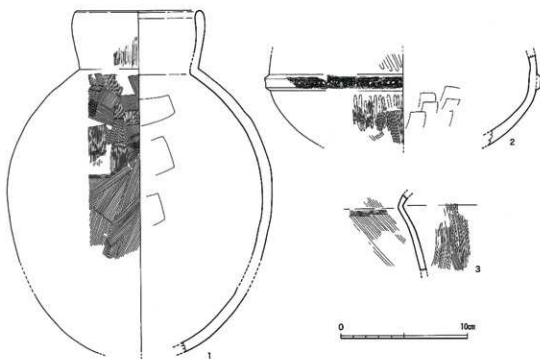
(2) 土坑

調査区全域から20基をこえる土坑が検出できた。出土遺物がみられず、帰属時期が不明のものも多いが、中世～近世に営まれたものが多いと思われる。

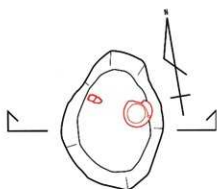
SK040 (第135・136図、写真図版40)

長径70cm、短径53cm、深さ30cmを測る楕円形土坑である。上層から破片の一部が、やや離れた位置にある完存した土師質土器環が、伏せた状態で出土しているほかは、遺物の出土はみられなかった。

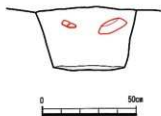
出土遺物は第136図に示した。口径14.4cm、器高4.2cm、底径9.5cmを測る土師質土器環であり、底面に回転系切り痕と板状圧痕が残る。器壁は厚く、鈍重な印象を受ける。



第134図 カネノトイ遺跡 1次調査区SH060出土遺物 (1/3)



L=42.0m



第135図 カネノトイ遺跡 1次調査区SK040 (1/20)



0 10cm

第136図 カネノトイ遺跡 1次調査区SK040出土遺物 (1/3)

(3) 掘立柱建物

調査区から 300 基をこえるピットが検出できた。明確に柱痕等が確認できたものは少ないが、掘立柱建物 4 棟が復元できた。柱列の方位から 3 つのグループに分けられ、大きく分けて 3 時期の建物であることが想定できる。

SB030 (第137図、写真図版40)

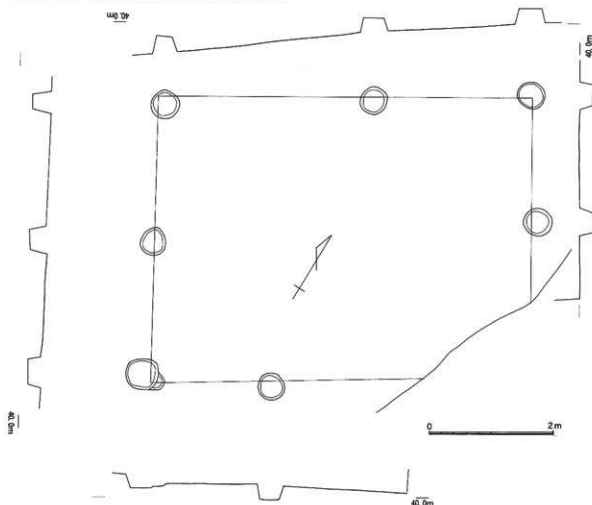
調査区のやや北側のSB035の北に位置する建物方位 $N-30^{\circ}-E$ の掘立柱建物である。南隅の柱穴がSB035と切り合いをもつため、SB035とは同時存在ではないことがわかる。身舎面積は25.8㎡を測る。規模は梁間2間(4.3m)、桁行2～3間(6.0m)と、東西に長いが、東南部が調査区外に位置するため、その位置の柱穴は検出できなかった。北西側2間の柱穴列は中央の柱穴がやや北東側による。遺構検出面の標高が自然地形の傾斜に近く、北西が高く南東が低いが、掘立柱建物柱穴はほぼ同規模であり、遺存深度も地形傾斜に関係なくほぼ同じである。

SB035 (第138図、写真図版40)

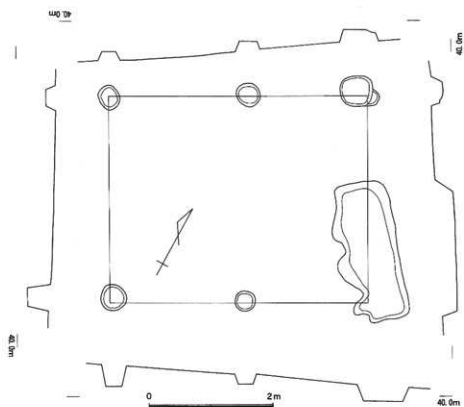
調査区のやや北側のSB030の南に位置する建物方位 $N-28^{\circ}-E$ の掘立柱建物である。北隅の柱穴がSB030と切り合いをもつため、SB030とは同時存在ではないことがわかる。身舎面積は25.8㎡を測る。規模は梁間1間(3.3m)、桁行2間(4.1m)と、東西に長い。

SB050 (第139図)

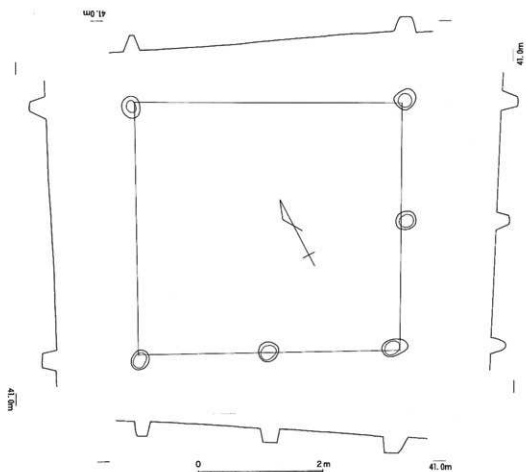
調査区の南端のSB045の北に位置する建物方位 $N-62^{\circ}-E$ の掘立柱建物であり、身舎面積は16.0㎡を測る。規模は梁間2間(4.0m)、桁行2間(4.0m)と、正方形を呈するが、西側と北側の中央の柱穴がそれぞれ検出できなかった。遺構検出面の標高が自然地形の傾斜に近く、西が高く東が低いが、掘立柱建物柱穴はほぼ同規模であり、遺存深度も地形傾斜に関係なくほぼ同じであり、東側および北側の中央の柱穴が両隅の柱穴より浅くもないため、当初から存在しなかったことが推測できる。



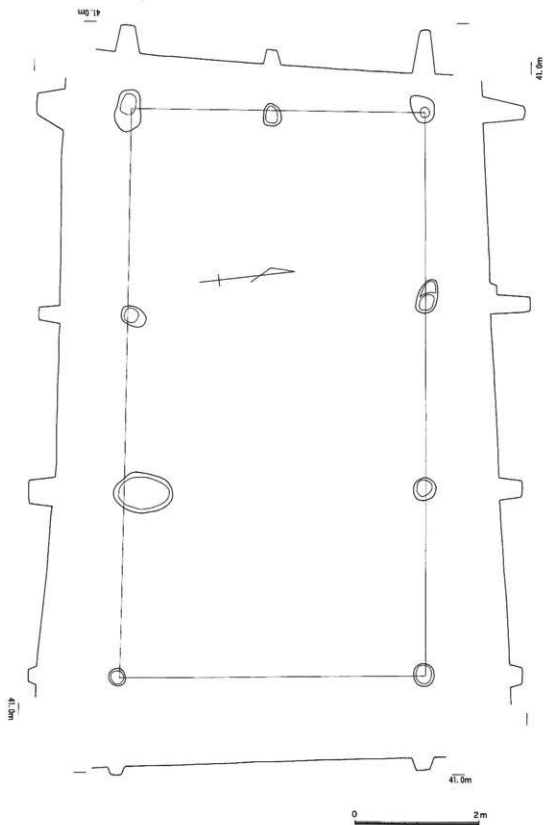
第137図 カネノトイ遺跡 1次調査区SB030 (1/60)



第138図 カネノトイ遺跡1次調査区SB035 (1/60)



第139図 カネノトイ遺跡1次調査区SB050 (1/60)



第140図 カネノトイ遺跡1次調査区SB045 (1/60)

SB045 (第140図)

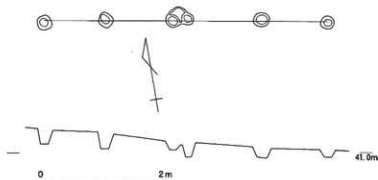
調査区の南端のSB050の南に位置する建物方位N-83°-Eの掘立柱建物であり、身舎面積は43.2㎡を測る。規模は梁間2間(4.8m)、桁行3間(9.0m)と、東西に長いが、東側梁間の中央の柱穴は1基検出できなかった。西側梁間の中央の柱穴が両隅の柱より30cm程度浅かったため、遺存深度の浅い東側梁間では中央柱穴の底まで削平されてしまっていることが推測できる。遺構検出面の標高が自然地形の傾斜に近く、西が高く東が低いため、掘立柱建物柱穴の遺存深度は東に向かうほど浅いが、柱穴底のレベルはほぼ同じである。

(4) 柵列

調査区から300基をこえるビットが検出でき、掘立柱建物が4棟復元できたほかに、柵列と思われるビット列が1列確認できた。このほかにも柵列が存在する可能性が残るが、確認できたもののみ報告する。

SA055 (第141図)

調査区の南端のSB050の北に位置する柵列であり、5基のビット列(4.5m)からなる。柱穴規模は小さく検出面の柱穴径は20cmをわずかにこえる程度である。遺構検出面の標高が自然地形の傾斜に近く、西が高く東が低いが、遺存深度も地形傾斜に関係なくほぼ同じである。



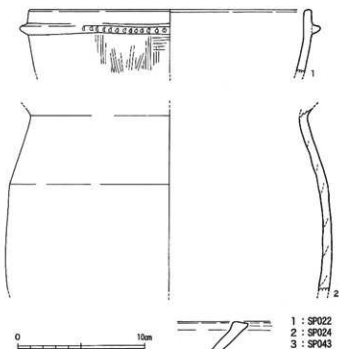
第141図 カネノトイ遺跡1次調査区SA055 (1/60)

(5) ビット

調査区から300基をこえるビットが検出でき、掘立柱建物が4棟復元できたほかに、柵列と思われるビット列が1列確認できた。このほかにも掘立柱建物や柵列が存在する可能性が残る。

ビットから出土した遺物は第142図に示した。いずれも、ビット出土とはいえ、小破片であり、ビット埋土中に先行する時代のものが混入した可能性も残ると思われる。

第142図1は弥生土器甕口縁であり、口縁直下に刻目突帯を貼り付けている。外面には縦方向の刷毛目、口縁から内面にはナデが施されている。2は土師器甕胴部であり、内面に



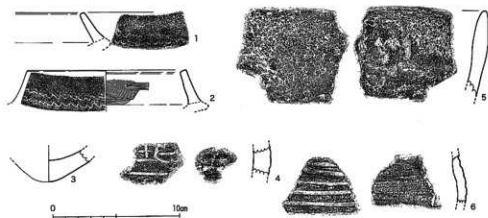
第142図 カネノトイ遺跡1次調査区ビット出土遺物 (1/3)

ヨコナデ、外面に横方向の削りの後にナデが施されている。3は瓦質鉢の口縁である。中世以降のものであろう。

(6) 遺構外出土遺物

遺構検出の際や地山上の黒色土中から遺物が少量、小破片で出土している。以下では図化できたもののみ紹介する。

第143図1・2は弥生土器壺口縁であり、外面に櫛描波状文を施文している。3は土師器壺の尖底部である。4～6は縄文土器である。5は無文土器の口縁部、4・6は鉢形土器の胴部片である。



第143図 カネノトイ遺跡1次調査区包含層出土遺物 (1/3)

3 小結

今回の発掘調査において、竪穴建物・掘立柱建物・土坑・柵列・ピットからなる良好な遺跡の広がりが確認できた。

これらの遺構群に先行して、縄文時代早期・後期、弥生時代中期・後期の遺物が出土しているため、遺構は確認できなかったが、当該期の遺跡が本調査区に存在していたか、あるいは周辺に存在することが想定できる。

これらに続き、古墳時代前期の竪穴建物が1基検出できた。床面までの残りは浅く、また、このような竪穴建物が単独で営まれていたことは考えにくい。本調査区から藤原友田遺跡にかけての谷部に同時期の集落が展開し、竪穴建物も存在するため、今回、検出されたピット群の中には竪穴建物の主柱穴であったものも存在するであろう。

さらに、ピットに関しては、300基以上が調査区全域から検出され、掘立柱建物が4棟復元できたほかに、柵列と思われるピット列が1列確認できた。このほかにも掘立柱建物や柵列が存在する可能性が残る。明確な時期がおさえられないものの、これらの主軸方向から3時期にわたり営まれたことが想定できる。中にはSK040のように鎌倉期に属する土器が出土した土坑もみられるため、この時期が、掘立柱建物や柵列の帰属時期を明らかにするうえで示唆的な資料となる。

第3節 カネノトイ遺跡2次調査区



第144図 カネノトイ遺跡2次調査区遺構配置図 (1/200)

1 調査の概要

2次調査区は1次調査区の南側にあたり、峠の最高位から北側に地形が下っていく緩斜面、西側の丘陵から東側に地形が下っていく緩斜面に位置する。現在、隣接地に国道10号線が走っており、調査区も併せて地形が削平されているものと推測できるが、削平時期は明らかでない。

発掘調査は便宜上、北区と南区に分けて切り返しを行い実施した。調査の結果、多数の柱穴のほか、土坑や溝などの遺構とともに少数だが遺物が確認された（第144図）。これらについて、以下で詳細を述べる。

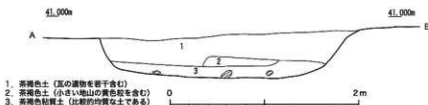
2 遺構と遺物

(1) 溝

調査区内で4条の溝が確認できた。北端のSD092、東端のSD001はのぞき、SD002・SD088・SD089とも埋土に大きな差がなく、切り合いも認められないため、同時存在であった可能性が高い。

SD088（第144・145・146図、写真図版43～45）

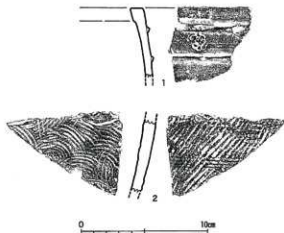
調査区の北端において検出された検出幅2.9～3.6m、最大深50cmを測る溝である。SD089の北側に位置し、平行して東西にのびる。東端で双方が接していることが確認できたが、その東側がどのように展開するかは調



第145図 カネノトイ遺跡2次調査区SD088断面図（1/40）

査区外であったため確認はできなかった。溝幅はほぼ均一である。深さは幅が広い西が30cmと浅く、幅が狭い東が50cmと深い。溝底のレベルは西端と東端を比較すれば、西端が60cm程度高く、自然地形の傾斜に伴うことがわかる。

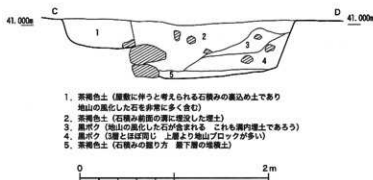
出土遺物は第146図に示した。1は瓦質土器火鉢である。口縁外面に2本の細い突帯を貼り付け、突帯間に梅状のスタンプを押しつけている。2は須恵器片であり、外面にタタキ、内面に当て具痕がみられる。



第146図 カネノトイ遺跡2次調査区SD088出土遺物（1/3）

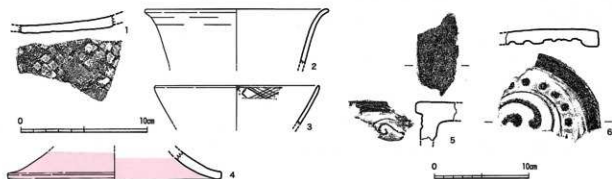
SD089 (第144・147・148図、写真図版43～45)

調査区の北端において検出された検出幅1.5～2.5m、最大深50cmを測る溝である。SD088の南側に位置し、また平行して東西にのびる。東端で双方が接していることが確認できたが、その東側がどのように展開するかは調査区外であったため確認はできなかった。溝幅はSD088に比較して狭く、西端の溝の南側には一抱えもある礫の石積み基礎がみられた。当初はこの石積みの上にも礫が積まれていたものと思われるが、現在は最下部のみが残る。SD089から波及したSD002に囲まれた中に生活空間があるとした場合、この石積みは溝の内側になる。深さは最深部が50cm程度であり、溝底のレベルは西端と東端を比較すれば、西端が25cm程度高く、自然地形の傾斜に伴うことがわかる。



第147図 カネノトイ遺跡2次調査区SD089断面図 (1/40)

出土遺物は第148図に示した。1は土師質土器鍋である。外面に大型の格子目のスタンプを押しつけている。2は口縁が外反する白磁皿である。3は18世紀後半の肥前の染付碗である。4は弥生土器高環の脚部片である。内外面に赤色顔料を塗布している。5は軒平瓦であり、唐草文がみえ、6は軒丸瓦であり、左巻き三巴文と珠文がみえる。



第148図 カネノトイ遺跡2次調査区SD089 出土遺物 (1～4は1/3、5・6は1/4)

SD002 (第144・149～153図、写真図版43～45)

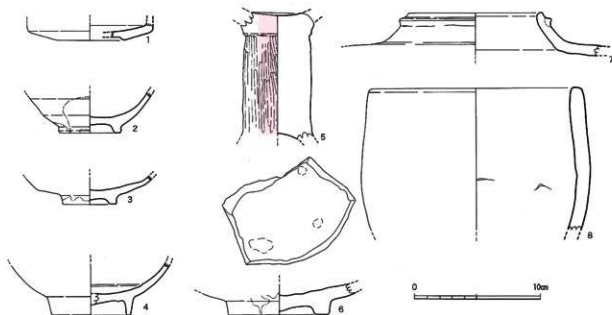
調査区の東側において検出された検出幅、0～1.5m、深さ20～30cmを測る溝である。SD089から波及して南に23m程度走るが、この溝の西側の肩は調査区の南端まで伸びている。

出土遺物は瓦が非常に多く出土しており、第150～153図に示した。第150図1は陶器碗である。内面及び外面の畳付や見込みを含めてすべて白色の釉を施している。2は陶器碗であり、内外面に褐色の釉が施されている。3も

磁器碗であり、内面に白色釉、外面に黒色釉が施されている。4は磁器碗であり、内面及び外面の畳付や見込みを含めてすべて白色の釉を施している。5は高坏脚部であり、外面に縦方向のミガキが施され、器面に赤色顔料を塗布している。6は陶器鉢であり内外面に灰黄色の施釉がみられる。内面には砂目痕がみられる。7は褐釉壺であり、口縁外面に三角突帯をめぐらす。8は瓦質土器鉢であり、外面にナデ、内面にヨコナデが施されている。



第149図 カネノトイ遺跡2次調査区SD002断面図 (1/40)

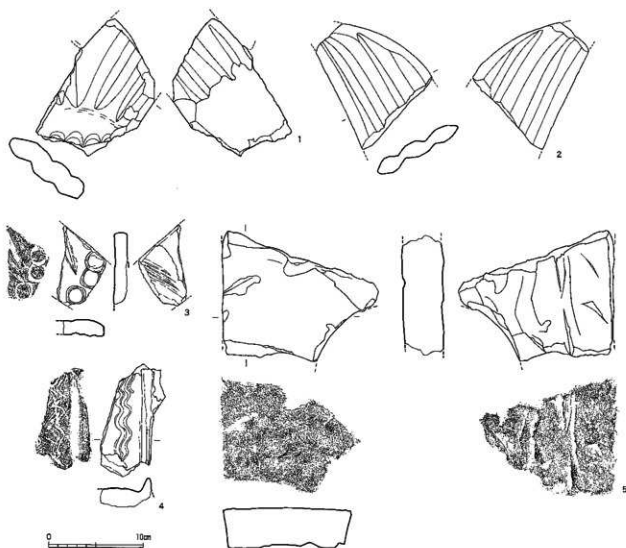


第150図 カネノトイ遺跡2次調査区SD002出土遺物① (1/3)

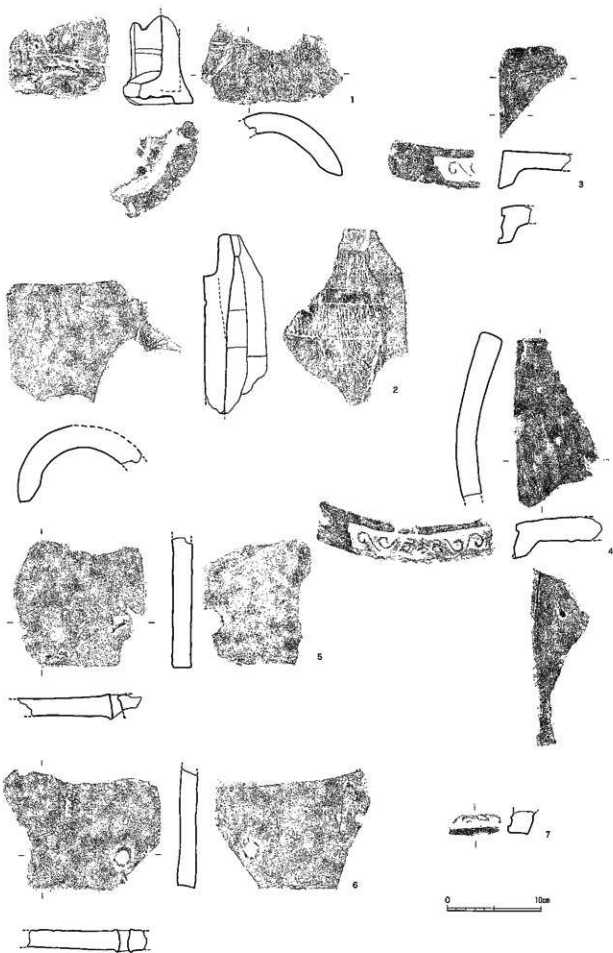
第151図1・2・3は鯉瓦の鱗である。1・2は尾鱗であり、1・3には鱗をあらわす竹管文が一部に残る。4も鯉瓦の破片であろうが、その部位は明らかでない。直線状に延びる三角突帯に平行して波状沈線が2～3条施されている。5は鬼瓦の地板であろうか。下辺のアーチ状部分が残る破片である。板状の瓦表面を不定方向のケズリで調整し、裏面を篋状工具で整えているが、工具痕が明瞭に残る。

第152図1は軒丸瓦であり、珠文がみえる。凹面には布目、凸面にはナデが施されている。2は丸瓦であり、凹面に布目とコビキ痕が残る。3・4は軒平瓦であり、唐草文がみえ、脇区幅が広い特徴をもつ。5・6は両面ともナデ調整を施し、釘穴を穿つ。詳細な用途は不明であるが、道具瓦の一種であろう。7は軒平瓦である。

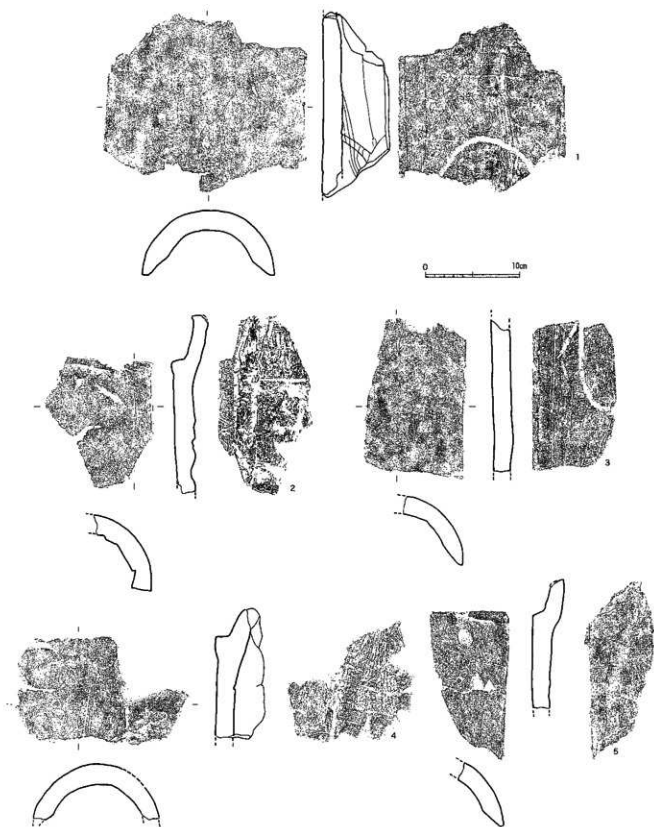
第153図は丸瓦である。いずれも凸面にはナデが施されている。2・4には内面に布目痕が、3には内面にコビキ痕の上に吊り紐痕が、5には内面にコビキ痕の上に布目痕が、1には内面にコビキ痕の上に布目痕と吊り紐痕がそれぞれ認められる。



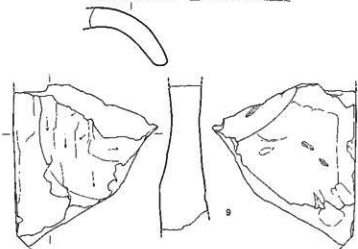
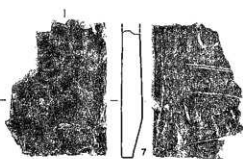
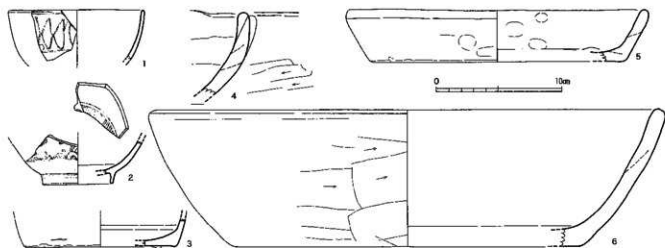
第151図 カネノトイ遺跡2次調査区SD002出土遺物② (1/4)



第152図 カネノトイ遺跡2次調査区SD002出土遺物③ (1/4)



第153図 カネノトイ遺跡2次調査区SD002出土遺物④ (1/4)

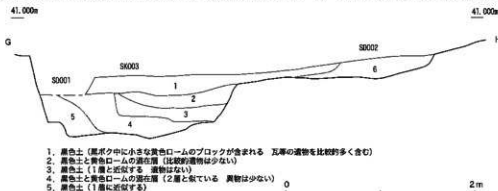


第154図 カネノイ遺跡2次調査区SD001出土遺物 (1～6は1/3、7～10は1/3)

SD001 (第144・154・155図、写真図版43～44・47)

調査区の東端において検出された検出幅1.2m、深さ45cmを測る溝である。北は調査区のなかで終息するが、その北にSK090・SK091など不定型の土坑が連続し、これらの土坑のつながりと無関係とは思えない。これらの土坑埋土の黒色土中には地山の黄色ロームのブロックが含まれており、一気に埋め戻された様相をもつ。SD001を切るSK003も同様の埋土であり、ほぼ同時期に営まれたものと思われる。

出土遺物は第154図に示した。1は肥前染付碗で1630～1650年のものである。2は景德鎮産青花蓮子碗であり、中世末のものである。3は陶器鉢であろうか。内面にのみ施釉されており、外面底部には目痕が残る。4・5・6は瓦質鉢であり、4には片口がつく。7は丸瓦であり、内面に吊り紐痕及び布目が、外面に縦方向の斲状工具によるナデがみられる。8は平瓦であり、凸面にナデ、凹面に斲状工具によるナデがみられる。9は鬼瓦の地板であろうか。表面にはナデが施され、裏面にはヘラケズリによる調整がみられる。10は鯉瓦の破片である。穿孔された耳および胸鰭と耳の周囲には竹管文による鱗が表現されている。内面には指おさえの成形痕とナデが確認できる。



第155図 カネノトイ遺跡2次調査区SD001・SD002・SK003断面図 (1/40)

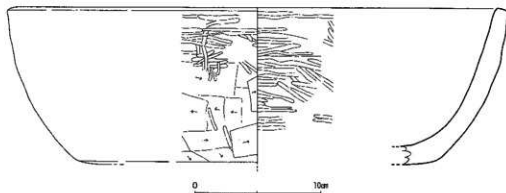
(2) 土坑

調査区の東端に様々な形態をもつ土坑が連続して営まれている。これらの土坑群は生活空間に検出されたピット群を取り囲むSD089・SD002の外側に分布し、丘陵の鞍部に開かれた水田下に位置する。これらの土坑群は調査区の東側に延びるものが多く、また、調査区外にも展開する可能性をもつ。

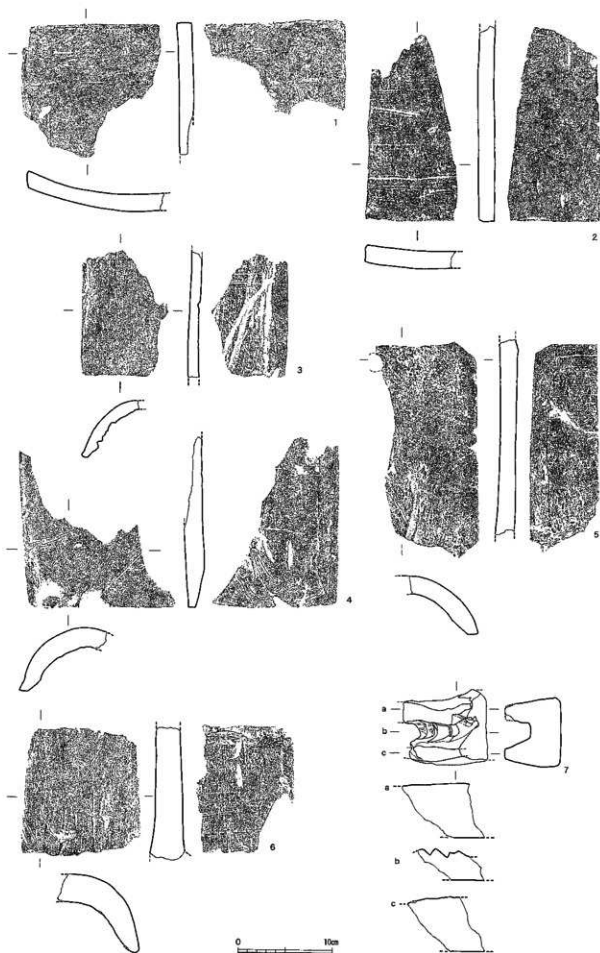
SK003 (第144・155・156・157図、写真図版47)

調査区の東端において検出された幅2.0～2.3m、深さ60cmを測る土坑である。その北にSK090・SK091など不定型の土坑が連続し、これらの土坑のつながりと無関係とは思えない。これらの土坑埋土の黒色土中には地山の黄色ロームのブロックが含まれており、一気に埋め戻された様相をもつ。SD001を切るが、埋土が近似し、近接した時期に営まれたものと思われる。埋土中から瓦を主体とした遺物が出土している。

出土遺物は第156・157図に示した。第156図は瓦質土器鉢である。内面および外面上半には丁寧なヘラミガキを、外面下半にはヘラケズリをそれぞれ施している。第157図1・2は平瓦である。凹凸面ともヘラ状工具によるナデが施されており、2の凹面にはコビキ痕も残る。3～6は丸瓦である。3の凸面にナデがみられ、凹面にはコビ



第156図 カネノトイ遺跡2次調査区SK003出土遺物① (1/3)

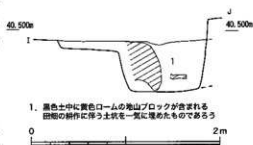


第157図 カネノトイ遺跡2次調査区SK003出土遺物② (1/4)

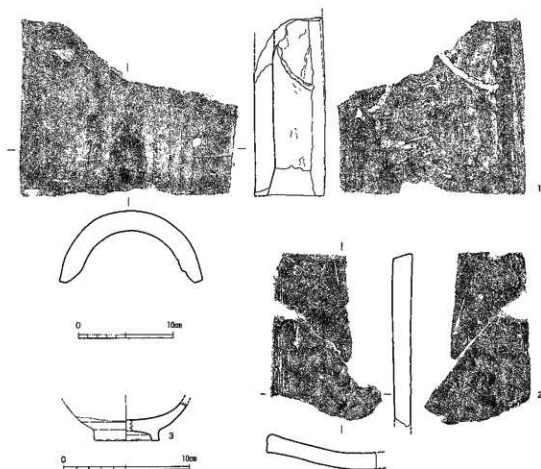
キ痕の上に布目痕と吊り紐痕がみえる。4の凸面にナデがみられ、凹面に布目痕がみえる。5の凸面にナデがみられ、凹面にコビキ痕がみえる。6は軒丸瓦であり、凸面にヘラ状工具によるナデがみられ、凹面にはコビキ痕の上に布目痕がみえる。7は鯉瓦の下顎であろうか。

SK090 (第144・158～160図、写真図版45・47)

調査区の東端において検出された南北幅2.3m、深さ50cmを測る土坑である。東西幅は1mあるが、調査区外まで伸びている。その南北にSK003・SK091など不定型の土坑が連続し、これらの土坑のつながりと無関係とは思えない。埋土の黒色土中には地山の黄色ロームのブロックが含まれており、一気に埋め戻された様相をもつ。



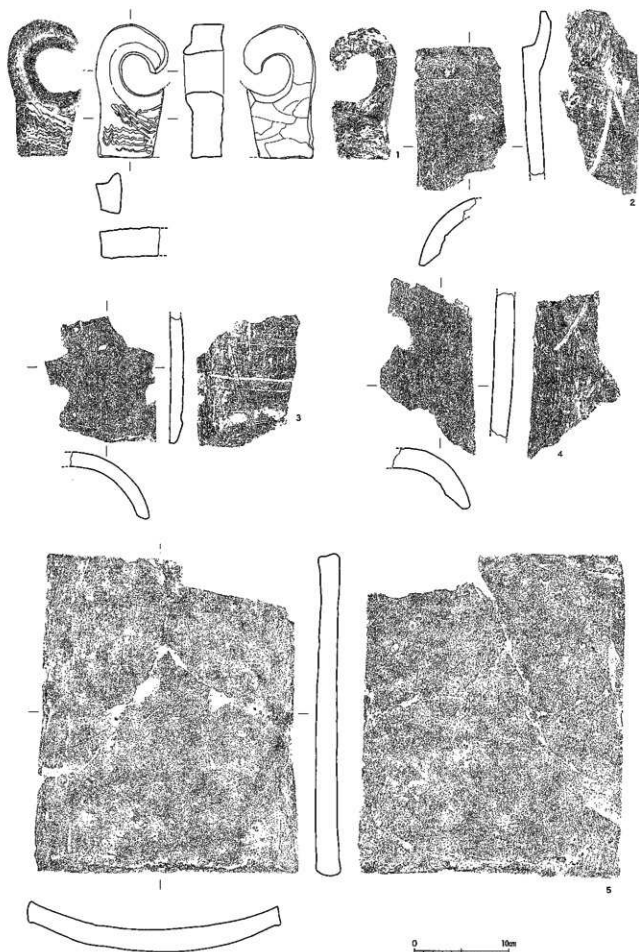
第158図 カネノトイ遺跡2次調査区SK090 断面図 (1/40)



第159図 カネノトイ遺跡2次調査区SK090出土遺物① (1・2は1/4、3は1/3)



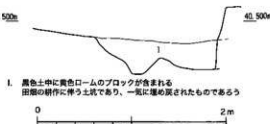
第160図 カネノトイ遺跡2次調査区SK090出土遺物② (1/4)



第161図 カネノトイ遺跡2次調査区SK091出土遺物 (1/4)

出土遺物は第159・160図に示した。第159図1は丸瓦である。凸面に縦方向のナデの単位がみられ、凹面にはコビキ痕の上に布目痕と吊り紐痕がみえる。2は平瓦であり、凹面には縦方向のナデが、凸面には縦方向のナデが、それぞれ施されている。3は陶器碗であり、内外面に施す。唐津焼土灰軸で1590～1610年のものであろうか。第160図1・2・3とも平瓦であり、いずれも凹面には縦方向のナデが、凸面には縦方向のナデが、それぞれ施されている。

SK091 (第144・161・162図、写真図版45・47)



第162図 カネノト遺跡2次調査区
SK091断面図 (1/40)

調査区の東端において検出された南北幅1.7m、深さ40cmを測る土坑である。東西幅は0.7mあるが、調査区外まで伸びている。その南にSK003・SK090など不定型の土坑が連続し、これらの土坑のつながりと無関係とは思えない。埋土の黒色土中には地山の黄色ロームのブロックが含まれており、一気に埋め戻された様相をもつ。

出土遺物は第161図に示した。1は鬼瓦の巻毛部分の部位であろうか。各面ともナデにより調整されているが、全体的に焼きが甘いせいか、黄色を呈する。巻毛の下半分の面のみ暗灰色を呈するため、この面で鬼瓦の他の部位と接着させていたものかもしれない。巻毛の下には波状文を連続させて彫刻しているが、接合面部分から途切れていることは、このことを証明するものであろうし、パーツごとに分割成形し、それを接合したのちに施文していることがわかる。2・3・4は丸瓦である。2は玉縁をもち、凸面にナデが施され、凹面にはコビキ痕の上に布目痕と吊り紐痕がみえる。3の凸面には縦方向にナデが施され、凹面にはコビキ痕がみえる。4には凸面に縦方向のナデの単位がみられ、凹面にはコビキ痕の上に布目痕と吊り紐痕がみえる。5は平瓦であり、凹凸面にナデが施されている。

(3) 櫛列

SD089とSD002に囲まれた空間に数多くのビットが検出されているが、比較的密度の薄い南側において櫛列が5列復原できた。いずれもSD089やSD002と平行するものであり、この2条の溝に区画された屋敷内の規格に則ってつくられたものであることが考えられる。

SA118 (第144・163図、写真図版43)

調査区南側のSD002に近接して位置する櫛列であり、方位N-17°-Eの並びをもつ5基のビット列(9.7m)からなる。溝からの距離が1.5～2.0mで溝と並行して走るため、この両者は相互に関連性をもとことが想定できる。柱穴規模は小さく検出面の柱穴径は20cmをわずかにこえる程度である。柱穴は削平を受けており、いずれも浅いが、底は標高40.7m内外のレベルで統一されている。

SA119 (第144・163図、写真図版43)

調査区南側のSA120に近接して位置する櫛列であり、方位N-11°-Eの並びをもつ3基のビット列(4.6m)からなる。柱穴は削平を受けており、両端は浅く、深さ10～20cmを測るが、中央のみやや深く、深さ30cmを測る。

SA120 (第144・163図、写真図版43)

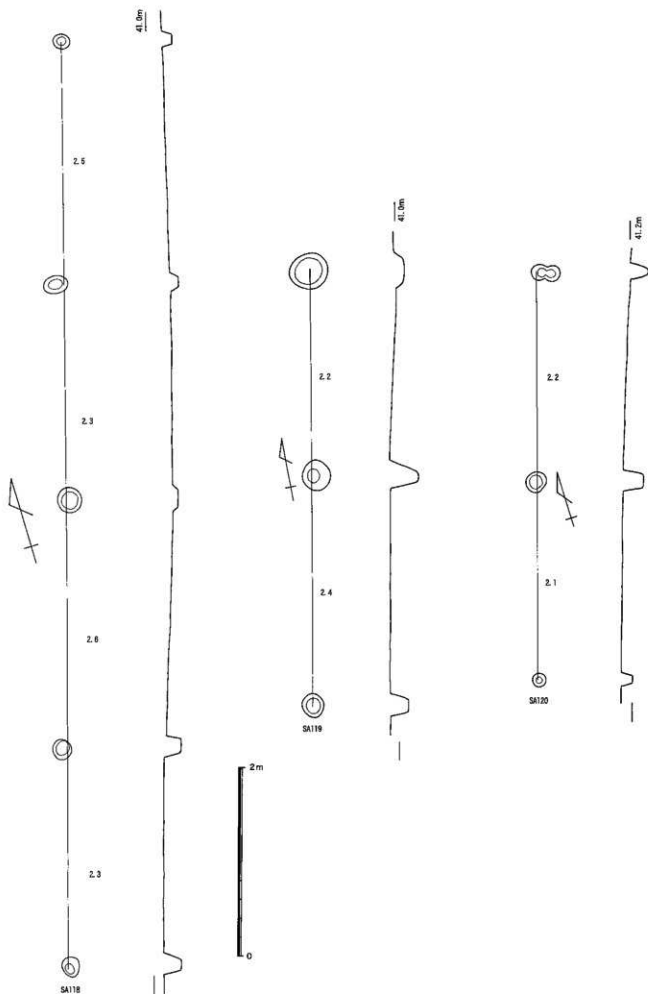
調査区南側のSA119に近接して位置する櫛列であり、方位N-17°-Eの並びをもつ3基のビット列(4.3m)からなる。柱穴規模は小さく検出面の柱穴径は20cmに満たなく、削平を受けており、いずれも浅い。

SA121 (第144・163図、写真図版43)

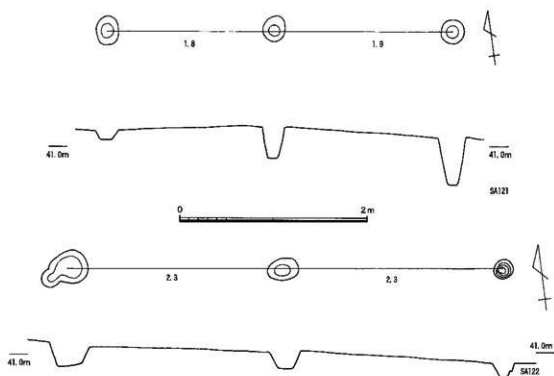
調査区北側のSD089に近接して位置する櫛列であり、方位N-13°-Eの並びをもつ3基のビット列(3.7m)からなる。柱穴規模は小さく検出面の柱穴径は20cmをこえる程度であり、東にいくにつれて深い。

SA122 (第144・163図、写真図版43)

調査区北側のビット群中に位置する櫛列であり、方位N-12°-Eの並びをもつ3基のビット列(4.6m)からなる。柱穴規模は小さく検出面の柱穴径は20cmをこえる程度である。柱穴は削平を受けており、いずれも浅いが、底は地形の傾斜に伴い、東にいくにつれて浅い。



第163図 カネノトイ遺跡2次調査区SA118・119・120 (1/40)

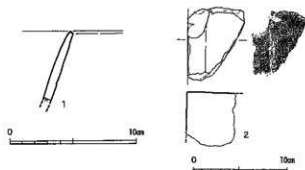


第164図 カネノトイ遺跡2次調査区SA121・122 (1/40)

(4) ビット (第144・165図、写真図版43)

SD089とSD002に囲まれた空間に107基のビットが検出されている。小規模のものが多く、中には上記のように、柵列として把握できたビットも存在する。出土遺物もみられるビットも存在するが、いずれも小破片であり、ビットの帰属時期の上限を決めるのみで、ビットの性格や明確な帰属時期を確定するものではなかった。

出土遺物は第165図に示した。1は土師質土器の口縁である。内面にヨコナデ、外面にナデが施されている。2は埴の破片であろうか。明橙褐色を呈し、表面はナデにより仕上げられている。



第165図 カネノトイ遺跡2次調査区ビット出土遺物 (1: SP054、2: SP064、1/3)

(5) 遺構外出土遺物 (第166～171図、写真図版51・52)

遺構外の遺物は第166～171図に示した。第166図1は縄文時代後期の深鉢片である。2は壺頸部の破片であろう。幅広の突帯を貼り付け、格子状の刻み目を入れている。突帯下の外面に縦方向のハケ、内面に横方向のハケのあとにナデが施されている。3は弥生土器壺の破片である。上面に円形浮文を貼り付け、口唇部に鋸歯状のキザミ目を入れている。4は土師質土器の甕であろうか。

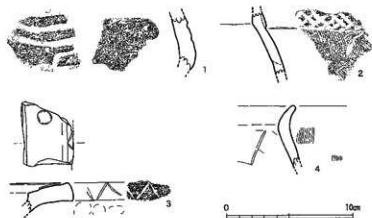
第167図は鉄砲の鉛玉であろうか。直径1.3cm、重さ6gを測るが、内部が空洞化している。

第168図1は青磁碗の破片である。外面にわずかにみえる模様は蓮弁であろうか。2は瀬戸美濃系天目茶碗である。3は土師質土器甕である。断面台形の高台を貼り付けている。内面及び見込み部にナデを施し、外面腹部は回転ヘラケズリを施している。4は磁器碗であり、高台畳付以外は内外面ともに施釉している。5は唐津焼の陶器小杯である。6は青磁筒形花生あるいは香炉であろうか。高台畳付以外は内外面ともに施釉している。7は18世紀代の肥前磁器皿である。8は磁器皿であり、見込みで蛇の目状に釉をはいている。9は白磁皿である。白色の磁胎に透明釉がかけられている。10は陶胎染付碗である。18世紀前半におさまるものであろう。11は18世紀代の肥前磁器碗である。12は関西系陶器土瓶である。18世紀後半～19世紀におさまるものである。13は関西系陶器の急須であろう。底部外面に「火郎請合」のスタンプがみえる。18世紀後半～19世紀におさまるものである。14は18世紀後半の唐津系陶器鉢である。15は18世紀以降の肥前磁器の段重であろうか。16・17・18・20は肥前焼溜鉢である。19は瓦質土器である。鉢であろうか。21は土師質土器杯であろうか。内面だけでなく、底部外面にもナデが施されている。22は土師質土器、23は瓦質土器である。いずれも鉢であろうか。24は陶磁器碗である。25は瓦質土器鉢である。26は瓦質土器火鉢の脚であろうか。27は瓦質土器土能の柄であろうか。

第169図1は平瓦である。凹面は縦方向のナデ、凸面は横方向のナデが施されている。2は軒平瓦である。凹面にはナデが施されているが、コビキ痕が残る。凸面にもナデが施されている。瓦当部分の残存部には唐草文様が残る。3は軒平瓦であるが、中心飾りの一部が残る。4は杭瓦の破片であろう。円環による鱗の表現と鰭の一部がみえる。5は軒丸瓦である。凸面にはナデ、凹面にはコビキ痕の上から吊り紐痕・布目痕が残る。瓦当は巴文であろう。巴の周囲の珠文が残る。6・7・8・9は軒丸瓦の瓦当である。巴文と珠文が残る。

第170図は丸瓦である。凸面にはすべてナデが施される。1は玉縁をもち、凹面にコビキ痕の上から布目痕が残る。2は凹面にコビキ痕の上から布目痕が残る。3は玉縁をもち、凹面にコビキ痕の上から布目痕・吊り紐痕が残る。なお、釘穴として円坑が穿たれている。4は凹面にコビキ痕の上から吊り紐痕が残る、釘穴として円坑が穿たれている。5は凹面にコビキ痕の上から布目痕・吊り紐痕が残る。

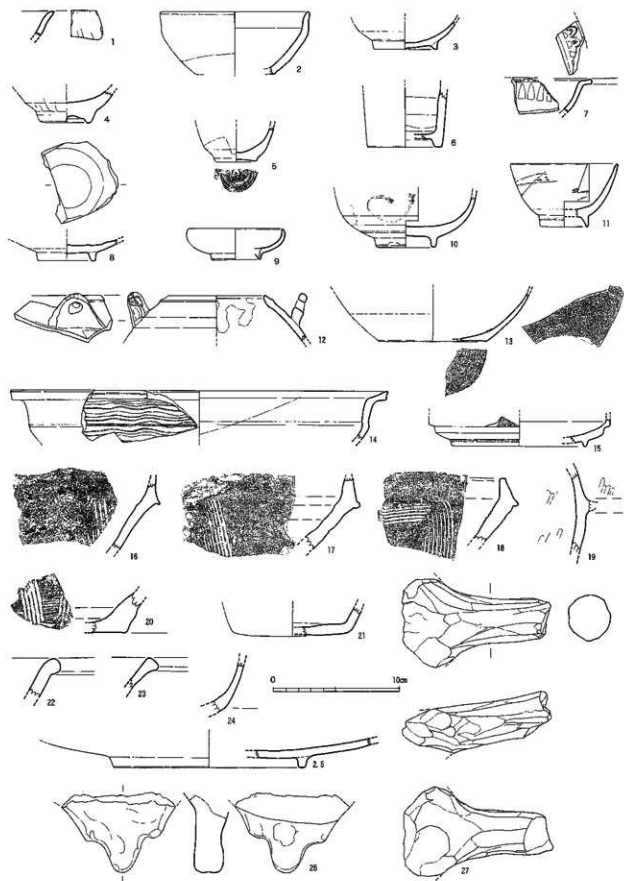
第171図は直径34cmを測る石臼上臼である。磨り目は5本6区画である。



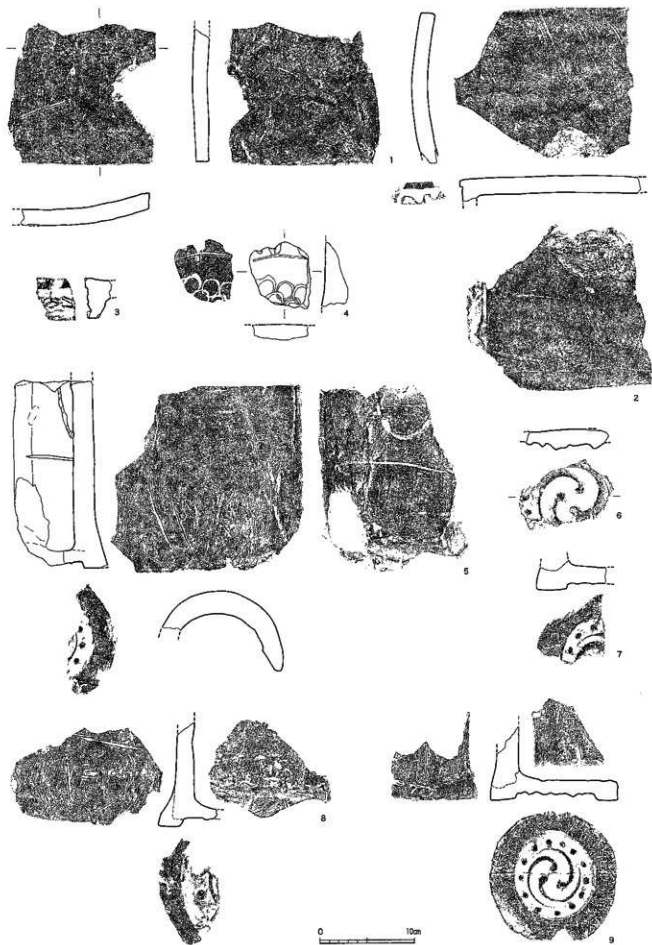
第166図 カネノトイ遺跡2次調査区遺構外出土遺物① (1/3)



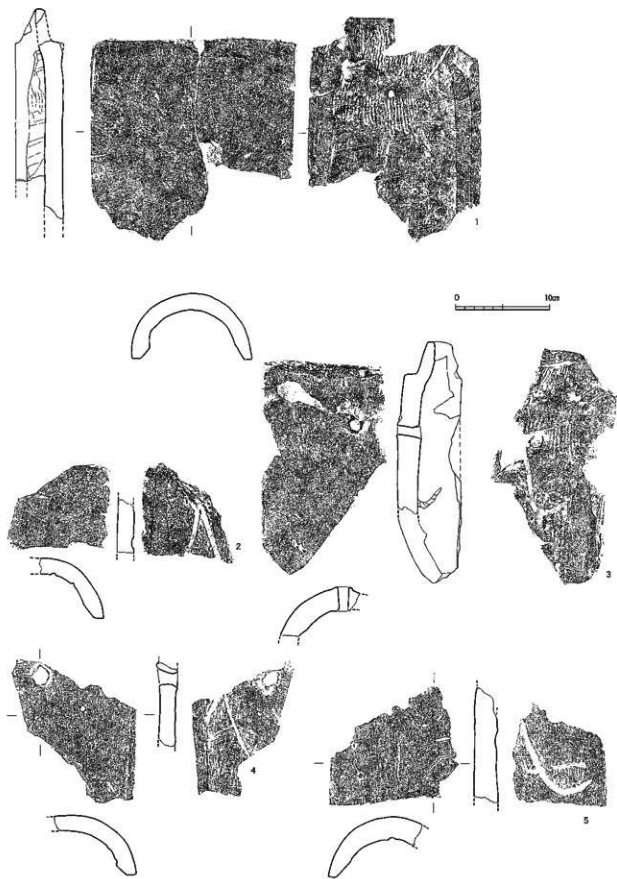
第167図 カネノトイ遺跡2次調査区遺構外出土遺物② (1/2)



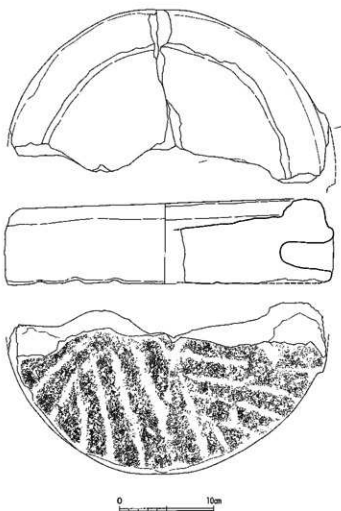
第168図 カネノトイ遺跡2次調査区遺構外出土遺物③ (1/3)



第169図 カネノトイ遺跡2次調査区遺構外出土遺物④ (1/4)



第170図 カネノトイ遺跡2次調査区遺構外出土遺物⑤ (1/4)



第171図 カネノトイ遺跡2次調査区遺構外出土遺物⑥ (1/5)

3 小 結

カネノトイ遺跡2次調査区は峠の鞍部の微高地という地形に存在し、本調査区からは堀や溝によって囲まれた屋敷の遺構が確認できた。明確な竪立柱建物は把握できなかったが、溝と平行する東西方向の欄列が2条、南北方向の欄列が3条確認できた。まず、溝の時期であるが、北端に東西に並行して走るSD088とSD089は同時存在であったと思われるが、出土遺物からSD088は戦国末～近世初頭、SD089は18世紀後半のものが最新であることがわかる。SD088については遺物が少ないため、SD089と同時期に埋没した可能性がある。ただし、埋土中の遺物に戦国末～近世初頭の遺物が確認できることから、この時期が開削期であると考えることができよう。また、SD089に続くと思われるSD002からは瓦が大量に出土しており、陶磁器類から17世紀前葉に埋没したことが考えられる。また、SD002の谷側に並行して走るSD001もSD002と同時期に存在したことがうかがえる。以上整理すると、開削時期は出土遺物から16世紀末～17世紀初頭であるが、小規模なSD001・SD002に関しては比較的早く、17世紀前葉には埋没し、北を限る大規模なSD088・SD089については、内側にあるSD089は18世紀後半まで営まれ、16世紀末～17世紀初頭から営まれた館あるいは寺院などの施設に伴う溝であったことがわかる。これらの溝に囲まれた中に検出されたピット群について、明確な時期がおさえられるものがみられないが、そのほとんどが溝に伴うものであるうし、5条の欄列については溝の方位に規制されており、これについても同時存在であったものと考えられよう。それでは、出土遺物はどのような様相をもつのであろうか。

本遺跡で特筆すべき遺物は瓦類である。九瓦に関しては、行基葺のものはみられず、残存するものはいずれも玉縁をもつ。内面調整はコビキBによる切筋後に、強く垂らす吊り紐痕と布目痕が残るもの、あるいは強く垂らす吊り紐痕のみが残るものに限られ、これ以外のものは確認できない。瓦当文様はいずれも三つ巴の周囲に珠文を配する文様をもち、三つ巴の方向が判断できる破片では反時計回りに限られることは共通するものの、外区の幅、珠文数、大きさ、三つ巴の形態等、複数の範が使用されていることがわかる。

平瓦は凸面に縦方向のナデ、凹面に横方向のナデを施す調整は共通する。また、軒平瓦は中心飾りの桐葉文の両側に唐草文を配する。瓦当文様の全容が復元できる資料はSD002出土の第152図4に示した軒平瓦のみである。小破片のため復元は困難であるが、同範ではないものを含む。特にSD089出土の第148図5に示した軒平瓦は唐草文様から上下逆転するものと考えられる。全容が復元できる第152図4に示した軒平瓦を詳細に観察すると、中心の桐葉の両側葉はわずかに外を向き、三葉とも葉脈を3本陽刻細線で表現している。この桐葉文の両側に唐草を2回転させているが、唐草の表現は頭から尾まで細く長い。また、脇区の幅が広いのも特徴のひとつといえよう。

大分県下では大分市府内城・丸遺跡などから出土しているが、考古学的に年代がおさえられる遺構としては、寛保3年(1743)の大火に伴う廃棄土坑から出土しており、確実に下限の年代を提示してくれるものの、必ずしも制作年代がおさえられるものではない(吉田寛2003b)。そこで近隣地に目をやると、福岡県北九州市小倉城下町、福岡県荒尾市松山城からも類似資料が出土している。第152図4については、佐藤浩司による小倉城下出土軒平瓦分類の桐葉文4・5・6類に近い意匠をもち、また、桐葉文とその両側の唐草文が上下逆転する第148図5も桐葉文7類に近い意匠であると想定できる。佐藤は、瓦製作集団と城主との関連を時期をおって辿り、桐葉文4・5・6・7類を製作した集団は毛利勝信期の後半代である慶長元年(1596)～慶長5年(1600)に帰属するものと考えており(佐藤浩司2003)、本例を理解するうえで一つの指標となろう。また、荒尾市松山城出土の軒平瓦については、松山城が天正15年(1587)、黒田孝高が豊臣秀吉から与えられて以降、細川氏の手に移り、慶長11年(1606)に破却されている。それゆえ自ずと天正15年(1587)から慶長11年(1606)の間におさまることが理解できるが、唐草文等が肉太であり、小倉城下出土例に近い印象を受ける(荒尾町教育委員会1992)。

以上のことから、カネノトイ遺跡2次調査区から出土した軒平瓦は16世紀末～17世紀初頭に製作された可能性が高いことがわかる。

当時、豊後では、大友氏の豊後除国後、豊臣秀吉自身、豊後を自らの直轄地とし、文禄3年(1594)から慶長2年(1597)にかけて、家臣たちを大名や蔵入地代官として送り込んでいる。吉田寛は、この動きに伴う織豊系城郭の築城を契機として新たな造瓦技法が導入され、その中にコビキBによる切筋技法が含まれていることを指

摘している(古田寛2003a)。本遺跡の軒丸瓦はすべてコビキBにより切断されており、軒平瓦の年代観に違和感はない。

上記の動向に関連して、日出地方でも新たな築城の動きがあった。カネノトイ遺跡2次調査区から1.5m程度、南西に日出城が存在する。日出城は慶長6年(1601)、豊後速見郡に3万石を与えられ入部した木下延俊により築かれた城である。木下延俊は慶長6年(1601)4月に家臣の中村勘右衛門と山田右衛門を日出に送り、松井康之から領地譲取を行わせた後、自らは同年8月に入国している。入国した木下延俊は、領内藤原の村正である阿南太郎右衛門の申し出を受け、太郎右衛門の屋敷を仮の館としている(日出町教育委員会1986)。南の谷部に広がる平野を一望できる高台にあり、のちに「御屋敷(御屋敷前)」と小字に残る場所であるが、峠の頂部に位置しているカネノトイ2次調査区からみても、900m北東方向に位置し、双方が視覚に入る位置関係にあったといえよう。8月に入国以降、翌年の8月まで1年間を築城に要し、完成後入城している。SD002出土の軒平瓦と日出城本丸跡2次調査区7トレンチ出土の軒平瓦が同范であることから、本調査で検出された遺構群が日出城および、それ以前に仮館とした阿南太郎右衛門とどのような関わりをもつか、気になるところである。

本遺跡の出土瓦に鯉瓦・鬼瓦をはじめとした飾り瓦の破片が出土していることは、注目に値しよう。鯉瓦は天正4年(1576)に築城が開始された安土城を皮切りに各地の城郭のみならず、寺院建築にも用いられるようになる(滋賀県教育委員会1998)。広島城三の丸跡の井戸からも目や鱗など部分的に金箔が残る鯉瓦が一対と通常の鯉瓦が一対の合計二対が、ほとんど完全な形で出土しているが、これについては、文禄元年(1595)から慶長3年(1598)の間、毛利輝元により天守が築かれた時期のものと推定されている(佐藤大規2009)。また、甲府城や信州上田城からも金箔が残る鯉瓦が出土しており、城郭建築において鯉瓦は、天守・櫓・櫓門などの主要な建物に上げられ、特に珍重な飾り瓦に位置づけられていることがわかる。これらの資料はいずれも中世末から近世初頭のもので位置づけられているが、類例が少ないゆえ、型式的な比較検討は行いがたい。しかし、鯉の形態をとりあげても、安土城や広島城三の丸跡から出土したものが写実的に彫成されていることに對し、本例が円環を連続してスタンプすることにより表現しており、より退化した型式をもつ。本遺跡の鯉瓦の帰属時期については併伴する軒平瓦の帰属時期である近世初頭としておきたい。

このように城郭建築において特に珍重された鯉瓦が出土したことは、本遺跡の性格を捉えるうえで重要な指標となる。前述した桐葉文をもつ瓦も、菊文をもつ瓦や金箔が施される瓦とともに権威の象徴として上意の許しを得てはじめて使用されるものと想定されており(加藤理文2003)、このような瓦類を製作できる階級にある人物は、当時、慶長6年(1601)、豊後速見郡に3万石を与えられ入部した木下延俊以外には考えにくいのではないであろうか。入国後、領内藤原の村正である阿南太郎右衛門の申し出を受け、太郎右衛門の屋敷を仮の館としていること、慶長7年(1602)8月まで1年間を築城に要し、完成後入城していることなど、一連の日出城築城までの動向と関連して捉えるべき瓦類であり、また、遺跡であると理解したい。本調査出土の軒平瓦と日出城出土の軒平瓦に同范のものが想定できることは何よりの証となろう。しかし、本遺跡の性格や機能について明言できる史料はみられない。今回の調査で検出された遺構群は、現在、国道10号線の下に眠る西側部分に展開するはずである。今後、この箇所の調査が行われることにより、遺跡の全貌が明らかとなり、さらに踏み込んだ評価が行われるであろうし、またそれを期待したい。

参考文献

- 阿南領久・中尾征司編 2003『日出城(陽谷城)本丸跡』日出町教育委員会
加藤理文 2003『瓦の普及と天守の出現』『戦国時代の考古学』高志書院
荻田町教育委員会編 1992『豊前国松山城址』
佐藤浩司 2003『小倉城下の近世瓦・宝珠文瓦・桐葉文瓦と小倉城主』『関西近世考古学研究 XI』関西近世考古学研究会

- 佐藤大規 2009「広島城出土の金箔鯉瓦についての考察」『広島大学総合博物館研究報告1』広島大学総合博物館
- 滋賀県教育委員会編 1998『特別史跡安土城跡発掘調査報告』八巻
- 日出町教育委員会編 1986『日出町誌』本編・史料編
- 古田寛 2003a「豊後府内」『関西近世考古学研究 XI』関西近世考古学研究会
- 古田寛 2003b「近世府内城・近世府内城下町跡出土瓦の編年の研究」『山口大学考古学論集』

第6章 総括

藤原友田遺跡・カネノトイ遺跡の所在する大字藤原周辺は日出町でも遺跡の濃密な地域であり、これまでも日出町社会福祉会館造成に伴う友田遺跡の発掘調査や野沢古墳群の調査で鹿骨製刀装具が確認されるなどしている。本節ではこれまでの調査に加えて、今回の調査結果から藤原地区周辺の歴史について総括する。

第1節 弥生時代～古墳時代の藤原地区

藤原地区周辺の弥生時代前期～中期の集落は、和泉第2遺跡・下野遺跡のように標高100mの丘陵高所部を中心として成田尾遺跡のような丘陵先端部にも展開している。後期になると今回調査を行った藤原友田遺跡や友田遺跡などの丘陵先端部を中心としたやや低い位置に広がっていく。藤原友田遺跡では弥生時代後期後葉に本格的に集落が形成され、古墳時代前期まで継続して営まれている。SD1123・SD1002・SD1004は集落の南側に展開する環壕と考えられる。しかし、建物跡はほとんど確認されておらず、内実は不明な点が多い。カネノトイ遺跡からは古墳時代前期の竪穴建物跡に加えて、弥生時代中期～後期の土器が出土している。また、友田遺跡からも日出町社会福祉会館建設に伴う発掘調査で、弥生時代終末期～古墳時代前期の土器が検出されており、溝や一括廃棄された土器が大量に出土した土坑もしくは竪穴建物跡が確認されている。このように、日出町大字藤原字友田～カネノトイにかけて弥生時代後期～古墳時代前期の集落が展開していることが確認された。

坪根伸也氏は大分県内の弥生時代集落の動向を検討する中で、別府湾岸地域（国東半島東部～旧大分市域にかけての海岸部）では中期まで丘陵の高所部に展開していた集落が後期になるとより低い場所を遷地するようになることを明らかにし、その立地条件から3つに細分している。また、中期から継続して営まれた集落は後期前葉で一旦廃絶するものが多く、後期後葉になると集落の大規模化もしくは新たに出現するという画期が認められるという。さらに、後期後葉新段階には独立丘陵への進出、大分平野の遺跡数の増加、大規模な環壕や条溝をもつ遺跡の出現を特徴として挙げられている。これらの大規模集落は古墳時代前期前葉まで継続し、その後姿を消すことが指摘されている（坪根2009）。片岡宏二氏は北部九州の弥生時代後期～古墳時代前期の集落動態を検討する中で当該期の環壕集落の分布状況から平野内拠点集落・緑辺部監視集落・遠隔地監視集落ネットワークによる有機的なつながりに着目している。その中で緑辺部監視集落は集落の人口では掘ることのできない環壕を有しており、平野全体の人々が係わったものと想定している。これらの集落は見晴らしが非常によく平野の出入りを監視することが目的とされる。その消長については、弥生時代後期に出現し終末期に姿を消していることから、古墳文化が流入することによってそれまで防衛すべき対象であったものがなくなると指摘する。具体的には小郡市三國の鼻遺跡・朝倉市西ノ迫遺跡・基山町千塔山遺跡が挙げられている（片岡2011）。

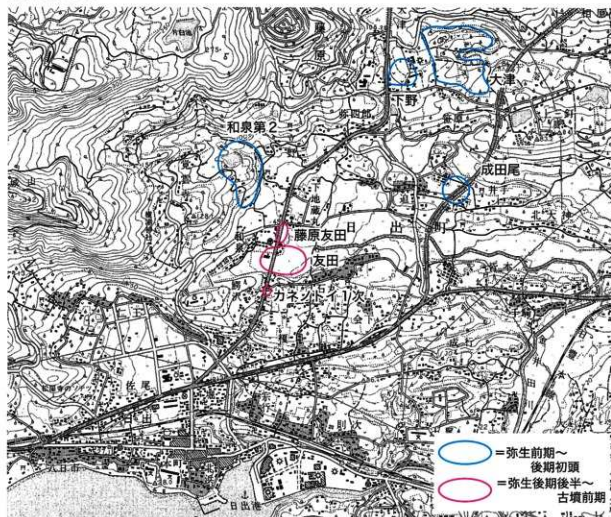
竪穴建物跡については、坪根伸也・稗田智美氏などの検討（坪根2009、稗田2010）から大分県下では弥生時代中期までは円形基調で、後期以降は方形が卓越していくことが確認されている。その中でも別府湾岸地域では円形の建物跡が後期後半まで残り、後期末になり方・長方形へ収斂していくようである。また、地床炉の南側に灰が溜まった浅い土坑が多く確認されるが、弥生時代後期末～古墳時代初頭に見られなくなる。今回の調査では藤原友田遺跡SH0174を除けば、建物のプランがわかるものはないが、方形であることや浅い土坑など当地域の一般的な竪穴建物跡とすることができる。

翻って、上述した藤原地区の弥生時代の集落動態を見てみると、前期～中期の集落立地や後期後葉以降の藤原友田遺跡や友田遺跡の出現とその継続期間など坪根氏の指摘する状況に酷似しており、当地区の状況は別府湾岸地域の一般的な状況と捉える事が出来る。藤原友田遺跡の大規模な溝は大分市多武尾遺跡（横尾遺跡）、米竹遺跡などの環壕と同様のものと考えられる。多武尾遺跡1次調査区SD-7は断面台形を呈し、弥生時代後期～終末期の土器が大量に出土している。土器の中には土製支脚や器台も含まれており、藤原友田遺跡SD1002の様相に類似している。また、藤原友田遺跡のSD1123・SD1002・SD1004の断面形はU字形からV字形に変化している。佐賀県千塔山遺跡でも後期後葉には環壕の断面がU字形であったものから庄内式併行期（弥生時代終末期・古墳時代初

頭)には断面V字形と変化している〔寺沢1998〕。藤原友田遺跡については一部を調査したのみで性格等を断定することは難しいが、少なくとも環濠の断面形からはより広範囲の動向に影響を受けたものと考えられる。また、その立地や集落景観からは片岡氏の緑辺部監視集落のような役割を持っていた可能性もある。

藤原友田遺跡・カネノトイ遺跡で出土した弥生時代後期～古墳時代前期の土器を概観すると、いわゆる安国寺式の複合口緑壺をはじめとする在地系の土器群が大半を占めている。その中で少数ではあるが、瀬戸内の影響を受けた器台(第32図-77)や山陰系の二重口緑壺(第42図-1)、鼓形器台(第61図-65)が認められる。これらの土器群は藤原友田遺跡の性格を考える上で重要な資料である。

その後、藤原友田遺跡のSK1001などの一部を除いて古墳時代前期後半～中期の遺構は少なく、当地区の詳細は不明である。古墳時代後期になるとSH0058・SH0084の2件の竪穴建物跡が認められる。周辺には、今村遺跡の竪穴建物跡3基(1号はカマド付き)などが知られている。周辺の古墳との位置関係をみると、鰐沢古墳群の前面に藤原友田遺跡が、穴観音古墳の東側に今村遺跡がある。背後(西側)に墓地があり、その前面の丘陵上に集落が展開するようである。しかし、3章でも述べたとおり藤原友田遺跡では竪穴建物跡以外の遺構は確認されず、当該期の遺物の出土量も非常に僅少である。そのため、古墳群を形成した集落の中心等については今後検討を重ねる必要がある。



第172図 藤原地区の弥生時代～古墳時代の様相 (S=1/25000)

第2節 中世の藤原地区

藤原友田遺跡・カネノトイ遺跡の両遺跡から掘立柱建物や土坑が検出され、14～15世紀と16世紀末～17世紀初頭に集落が展開していたことが確認された。以下、14～15世紀と16世紀末～17世紀初頭にかけて総括する。

豊後国は鎌倉時代に大友能直が守護となって以来、大友系氏族が豊後大神氏等の非大友系氏族の所領を奪取しながら勢力を拡大していった地域でもある。その中で現在の日出町は速見郡大神郷・山香郷に属しており、平安時代後期には宇佐神宮寺弥勒寺領の荘園大神庄・日出庄が成立している。鎌倉時代には一部が嵯宗北条家領となり、建武の新政後に日出庄の地頭は戸次氏に与えられている。南北朝の動乱を経て、室町時代には大神・日出庄の両半分の地頭職を戸次氏、日出庄半分の地頭職は田原氏、大神庄のうち「真那井・野木乃井村」は大友惣領家の直接支配するところとなった。地理的には、豊前国から府内（大分市）へ至る重要なルート上にあり、その防衛の要である鹿鳴越城をはじめとして在地領主の山城が認められる。

藤原友田遺跡やカネノトイ遺跡の調査成果からは字友田～カネノトイにかけて東から延びる丘陵先端部に14～15世紀を中心とした集落が展開していることが確認された。藤原友田遺跡からは、掘立柱建物跡SB1138をはじめとして多数の土坑が確認された。中でも在地系土師質土器が大量に一括廃棄された土坑や川原石を大量に廃棄した井戸と考えられる土坑や燭台の存在から、一般的集落ではなく館跡や寺院跡といったより上位に位置する遺跡と推測される。おそらく、藤原友田遺跡周辺に当地区の核となる施設が存在し、その南側の東西に走る谷を隔ててカネノトイ遺跡のような一般集落が展開していたものと考えられる。そして、その背後に上城が控えており、眼下に大字藤原～日出を睨みながら別府湾を見通す小地域が想起される。上城は、13～14世紀前半には溝を含めた「防衛的な居住施設」であり、本格的な城郭として利用されるのは15～16世紀である〔小柳2003〕。藤原友田遺跡と上城の遺構の時期は上城の前身時期から本格的に利用された端緒の時期と一致する。

日地町域は平安時代から大神庄と日出庄が存在したが、『弘安園田帳』によれば日出庄（日出・津島）70町を大友相模守、大神庄の近部・藤原・井手村70町を戸次大郎時頼、真那井・野木乃井之村30町を利根次郎頼親といずれも大友氏が地頭職を押さえている。一方で、鎌倉時代末期には日出庄・大神庄の地頭職の一部が北条貞時の所領となっている。その後は、上述のように南北朝の動乱後、戸次氏と田原氏が地頭職を占めるようになる。

『入江文書』では文和年間（1352～1355）に藤原荘が新たに成立しており、前述した近部・藤原・井手村70町が大神庄から割かれたものであろう。戦国時代には、日出町から杵築市山香一帯には中小の土豪層が勢力をもち、「山香東西一揆」と呼ばれる集団を形成していた。上城～藤原友田遺跡周辺もその中の1つである大友氏の鉄砲鍛冶である伊東氏一族の勢力圏と考えられている〔原田・松本編2003〕。ただし、その時期の遺構・遺物も藤原友田遺跡・カネノトイ遺跡とも希薄である。

これらのことから、藤原友田遺跡で認められる14～15世紀の遺構は、上述の状況に伴う館跡もしくは寺院跡の可能性が高い。

16世紀末～17世紀初頭以降の遺構はカネノトイ遺跡2次調査区SD001・002・088・089・櫓121などがある。SD088・089は東西に走る区画溝であり、SD002からは瓦が大量に出土している。これらの瓦の中には、喝谷（日出）城の創建瓦と同じ軒平瓦がある。喝谷城は、慶長6（1601）年に木下延俊が関ヶ原の合戦の論功行賞による入封の後築かれはじめ、慶長7（1602）年7月に完成している。織豊期～江戸時代初期の瓦生産は、それまでの伝統的な土器や瓦の生産地にこだわらず、遠隔地の瓦工人集団が来訪してその地にグルマ窯を製作し、瓦生産を行った例が知られている。日出町内では中世大神焼が知られているが、日出城の瓦生産がどこで行なわれたかは現在のところ不明である。また、木下延俊は慶長6年8月に藤原村の村正阿南太郎左衛門（惟親？）の屋敷を仮屋敷としたとされる〔阿南・中尾編2003〕。カネノトイ遺跡2次調査区で出土した鯉瓦はこれまで城郭では天守・櫓・櫓門に使用が知られているのみで、権威的な建物に専ら使われていた可能性が高い。また、カネノトイ遺跡2次調査区からは、阿南太郎左右衛門の屋敷と喝谷城の両者が見える絶好の位置にある。それゆえに木下延俊が喝谷城を築くまでに重要な施設を築いた可能性が考えられる。

【参考文献】

阿南祐久・中尾征司編 2003 『日出城（喝谷城）本丸跡』日地町立日出小学校校舎・体育館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日出町文化財報告書第4集



第173図 藤原地区の中世の様相 (S=1/25000)

- 片岡宏二 2011『邪馬台国論争の新視点―遺跡が示す九州説―』雄山閣
- 栗田勝弘・清水宗昭編 1992『成田尾遺跡、今村遺跡、馬場尾遺跡』大分空港道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 大分県文化財調査報告第88輯 大分県教育委員会
- 小柳和宏編 2003『大分の中世城館』第三集 地名表・分布図編 大分県文化財調査報告書第161輯 大分県教育委員会
- 小柳和宏 2003『第5章第5節3 日出町上城について』『和泉第1遺跡 和泉第2遺跡 東カヤノ原遺跡』一般国道10号日出バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 大分県文化財調査報告書第151輯 大分県教育委員会
- 小柳和宏編 2004『大分の中世城館』第四集 総論編 大分県文化財調査報告書第170輯 大分県教育委員会
- 佐藤曉編 1986『日出町誌』本編・史料編 日出町
- 都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』青木書店
- 坪根伸也 2009『大分県における弥生時代後期の社会変化』『弥生時代後期の社会変化』第58回埋蔵文化財研究集会発表要旨・資料集 第58回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 坪根伸也編 2010『下郡遺跡群Ⅷ』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第100集 大分市教育委員会
- 寺澤 薫 1998『3 集落から都市へ』『古代国家はこうして生まれた』(都出比呂志編) 角川書店
- 原田昭一・松本康弘編 2003『和泉第1遺跡 和泉第2遺跡 東カヤノ原遺跡』一般国道10号日出バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 大分県文化財調査報告書第151輯 大分県教育委員会
- 神田智美 2010『第IV章第3節 弥生時代堅穴住居跡の集成』『下郡遺跡群Ⅷ』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第100集 大分市教育委員会

表11 藤原友田遺跡遺物観察表①(土器・陶磁器)

押印番号	番 号	区 域	遺 構	取り上 げ番号	時 期	器 種	法量 (cm) () は復元径			外面の文様・調整	色 調	内面の文様・調整	胎土(○:多い、△:含む、◇:わずか)					備 考
							口径	底部	器高				南 西 石	長 石	赤 色 土	青 色 土	その他	
8	1	C9	SD0001		弥生	複合口縁壺				ナデ、タテハケ、波 状文	淡黄褐色	指圧、ヨコナデ	○	○				
8	2	D2	SD0001	No.31	古墳	壺				タテ方向調整後ヨ コナデ	淡白灰色 淡黄灰色	タテ方向のハケメ	○	○	○			
8	3	D2	SD0001		古墳	壺				ナデ	淡茶褐色	ナナメ方向の工具 ナデ	○	○		○		
8	4	D2	SD0001		弥生	壺			1.5	タテ方向のハケメ	淡白灰色	指圧、タテ・不定方 向のハケメ	○	○			○	
8	5	D2	SD0001	No.15	弥生～古墳	壺				不定方向のハケ メ、ナデ	淡黄白色	タテ方向のハケ メ、ナデ	○	○				
8	6	D2	SD0001	No.34	弥生～古墳	小型壺	9.8	10.8	11.7	ナデ後ヨコ、タテ 方向ミガキ	淡褐色	ケズリ調整、ナデ 後ヨコ、タテ方向 ミガキ	○	○				頸部に焼成時の割 離痕あり、體色痕あり
8	7	D2	SD0001		弥生～古墳	小型壺	4.2	4.6	7.9	ナデ	暗褐色	指圧、ナデ	○	○				底部、側面に黒斑
8	8	D2	SD0001	No.26	弥生～古墳	小型壺	11.8	15.0	11.1	ナデ	黄灰褐色	ナデ	○	○				内外に丹塗り・黒斑 あり、内傾痕あり
9	9	C2	SD0001		弥生	甕	17.0	31.6		ヨコナデ、タテハ ケ、ナデ、 ナナメハケ (7本/cm)	淡橙褐色	ヨコナデ、ナナメ ハケ(7本/cm)、ナ デ	○	○				黒斑あり
		D2	SD0001															
		D2	SD0001	No.17														
		D2	SD0001	No.18														
		D2	SD0001	No.19														
		D2	SD0001	No.20														
9	10	C2	SD0001	No.21	不明													
		?																
9	10	C2	SD0001	No.1	弥生	甕	20.4	20.2	27.5	口縁部:ヨコハケ ナメハケ、タテ ハケ	浅黄褐色 暗褐色	口縁部:ヨコハケ ナメハケ、タテ ハケ	○	○				使用痕、被熱・スス 付着
9	11	D2	SD0001	No.29	弥生	甕	17.6		10.8	ヨコナデ不定方向 のハケ跡ナデ	淡褐色 暗褐色 黒色	ヨコナデ、 タテハケ(10～11 本/cm)	○	○				
9	12	D2	SD0001		弥生後期末	甕	18.0		12.1	タテハケ(6本/cm)	淡褐色 暗褐色	指圧、ナナメハケ、 タテハケ	○	○				
9	13	D2	SD0001		古墳	土師甕	(14.8)			タテ方向のハケメ	浅黄褐色	指圧の後ヨコナ デ、ヨコ・タテ方向 の調整	○	○				
9	14	C2	SD0001	No.4	古墳時代前期後半	甕	14.0		10.5	ヨコナデ、不定方 向のハケ、 割離が多くある	浅黄褐色	ヨコナデ指圧後不 定方向のハケ	○	○				一部残存
9	15	C2	SD0001	No.3	古墳	甕	(16.2)			指圧、ヨコナデ	明褐色	指圧、ヨコナデ	○	○				
9	16	C2	SD0001		古墳	甕	(12.1)			ヨコナデ	淡黄白色	ヨコナデ、ナデ	○	○				
9	17	D2	SD0001	No.17	古墳	甕	(18.0)			ヨコナデ、タテ方 向ハケメ	淡黄褐色	ヨコナデ	○	○				
9	18	D2	SD0001	No.16	古墳	小型	12.0		9.0	ヨコナデ後タテハ ケ	淡褐色 暗褐色 黒色	ヨコナデ後ユビナ デ	○	○				
9	19	C2	SD0001		古墳	甕	(13.8)			タテ方向のハケメ (9本/cm)	淡黄褐色	指圧後のヨコナデ	○	○				
10	20	D2	SD0001	No.22	弥生	高杯	27.0		7.0	ミガキ	淡橙褐色	ミガキ	○	○				
10	21	D2	SD0001	No.13	弥生	高杯	28.0		6.8	ケズリ後ナデ	黄茶褐色	ナデ後タテ方向ヘ ラミガキ	○	○				
10	22	D2	SD0001	No.12	弥生	高杯	4.6	18.2	12.7	縦方向のヘラミガ キ	明褐色	しぼり痕、ヨコハ ケ(7本/cm)、ヨコハ ケを割すナデあり	○	○		△		
10	23	D2	SD0001		弥生	高杯				工具によるタテ方 向のミガキ	淡黄褐色	絞り痕	○	○				
10	24	D2	SD0001	No.32	弥生	高杯		4.0	15.6	縦方向のヘラミガ キ	淡黄白色	しぼり痕、ヨコハ ケ(7本/cm)、ナデ	○	△	○			
10	25	D2	SD0001	No.27	弥生	鉢	12.0	7.8	0.9	タテハケ後ヨコ、 タテ方向ミガキ	暗褐色	ナデ後、タテ方向 ミガキ	○	○				割離、打ち欠けあり

表12 藤原友田遺跡遺物観察表② (土器・陶磁器)

探 図 番 号	番 区 域	遺 構 番 号	取 り 上 げ 番 号	時 期	器 種	法量 (cm) () は復元径			外面の文様・調整	色 調	内面の文様・調整	胎土 (○:多い, ○:含む, △:わずか)				備 考
						口径	底部	器高				角四 角五 角六 角七 角八 角九 角十	長 石 瓦			

表13 藤原友田遺跡遺物観察表③(土器・陶磁器)

調査 番号	区 域	遺 構	取り上 げ番号	時 期	器 種	法量 (cm) () は復元径			外面の文様・調整	色 調	内面の文様・調整	胎土(○:多い、○:含む、△:わずか)				備 考
						口徑	底部	器高				陶 質 石 灰	長 石 英	赤 色 粘 土	白 色 粘 土	
17	10	B8	SD1002		弥生	複合口縁壺	14.0		格子目文、ナデ	にぶい黄 褐色		○	○		○	
17	11	B8	SD1002		弥生	複合口縁壺		12.0	ヨコ方向のナデ、 ナデ	淡褐色	ヨコ方向のナデ、 ナデ ヘラ状工具ナデ	○	○			頸部、刻み目突帯は 後付け
18	12	B9	SD1002		弥生	壺			ヨコナデ	淡黄色	ヨコナデ、指圧	○	○	○		
18	13	B8	SD1002		弥生～古墳	壺			頸部:タテハケ後ナデ 指圧、タテハケ後ナデ	淡褐色	頸部:ハケ後ナデ タテ方向の工具ナ デ後ナデ	○	○	○	○	刻み目突帯(後付 け)
18	14	SD1002	西壁 P5		弥生	壺			タテハケメ	暗灰色	ヨコナデ	○	○	○		
18	15	B9	SD1002		弥生	壺			指ナデ	にぶい橙 色	指ナデ	○	○	○		穿孔あり
18	16	B8	SD1002		弥生～古墳	壺			タテハケ後ナデ	淡褐色	工具ナデ後ナデ	○	○		○	刻み目突帯(後付 け)
18	17	SD1002	西壁 P2		弥生	壺			ヨコナデ	にぶい橙 色	ヨコナデ	○	○			
18	18	B8	SD1002		弥生～古墳	壺			ナデ	淡褐色	工具ナデ後ナデ	○	○	○		刻み目突帯(後付 け)
18	19	B9	SD1002		弥生～古墳	壺			タテ方向のミガ キ、タテハケ後ナ デ	淡褐色	工具ナデ後ナデ	○	○		○	刻み目突帯(後付 け)
18	20	B8	SD1002		弥生～古墳	壺			頸部:ナメハケ 後ナデ ハケ後ヨコナデ	淡褐色	ヨコ方向のハケ後 ヨコナデ	○	○		○	刻み目突帯(後付 け)
18	21	B8	SD1002		弥生	壺		8.4 2.2	工具ナデ	灰黄色	タテハケ後指ナデ	○	○	○		底部に焼成あり
18	22	B9	SD1002		弥生	埴または鉢	9.6	10.0 7.1	ヘラミガキ	暗灰色	指圧後工具ナデ	○	○			
18	23	B8	SD1002		弥生～古墳	小型壺		6.6	タテハケ、ナデ	橙褐色	指圧、ナデ	○	○	○		外面:黒斑、焼痕あ り
18	24	SD1002		弥生～古墳	小型壺	7.6	10.3 9.8		口縁部:ヨコナデ 不対称ナデ、ヘ ラ状ナデ	淡黄色	口縁部:ヨコナデ 指圧、ナデ	○	○	○		胴部:穿孔一ヶ所あ り
18	25	B8	SD1002		弥生～古墳	小型壺	5.6	8.2	タテハケ、工具ナ デ	灰黄褐色	工具ナデ、指圧	○	○		○	外面:丹塗あり
18	26	B8	SD1002		弥生～古墳	小型壺			口縁部:ヨコナデ ナデ	にぶい黄 褐色	工具ナデ後ナデ	○	○	○		
18	27	B8	SD1002		弥生～古墳	小型壺	9.1	8.0	口縁部:ヨコナデ、 ミガキ	灰褐色	指圧、ナデ	○	○		○	
18	28	B8	SD1002		弥生	壺			ヨコナデ	黄褐色	ヨコナデ	○	○			
18	29	B8	SD1002		弥生	壺			ヨコナデ、突帯貼 り付け	淡黄褐色	ヨコナデ、指圧	○	○			
19	30	B8	SD1002		弥生	甕			口縁部:ヨコナデ タテハケ後ナデ	淡褐色	口縁部:ヨコナデ ハケ後ナデ	○	○	○	○	内外ともにスス付 着、二次加熱あり
19	31	B9	SD1002		弥生～古墳	甕		19.6	口縁部:ヨコナデ ヘラ状工具ナデ	浅黄色	ヘラ状工具ナデ	○	○		○	
19	32	B8	SD1002		弥生	甕		19.6	口縁部:ナデ、ヨコ ナデ タテハケ後ナデ	淡褐色	口縁部:ヨコナデ ハケ、指圧、ナデ	○	○	○	○	
19	33	B8 SD1002 B9 SD1002		古墳	甕	19.0	26.0		頸部:ヨコナデ タテハケ、ヨコハ ケ後ナデ	灰黄褐色	タテハケ、ナデ	○	○	○		
19	34	B8	SD1002		弥生	甕		19.2	口縁部:タテハケ 後ヨコナデ、ナデ タテハケ後ナデ	淡茶褐色	口縁部:ヨコナデ 工具ナデ	○	○		○	黒斑あり、口縁部に 打ち欠けあり
19	35	B8	SD1002		弥生	甕		20.6	口縁部:ナメハケ 後ヨコナデ、指圧、 タテハケ後ナデ	淡茶褐色	口縁部:指圧、ヨコ ナデ 指圧、ハケ、ナデ	○	○	○	○	
19	36	SD1002		弥生	甕	15.5	12.7 6.7		指ヨコナデ	灰黄褐色	ヘラナデ	○	○			
19	37	SD1002		弥生	甕	11.7	10.3 7.1		口縁部:ヨコナデ ハケ後ヨコナデ	灰黄褐色	指圧	○	○			

表14 藤原友田遺跡遺物観察表④(土器・陶磁器)

埋蔵 図 号	番 号	区 域	遺 構	取り上 げ番号	時 期	器 種	法量 (cm) () は復元径			外面の文様・調整	色 調	内面の文様・調整	胎土(●:多い,○:含む,△:わずかに含む)						備 考
							口径	底部	器高				角石	長石	灰	赤土	その他		
19	38	B9	SD1002		弥生	甕	17.1	14.6	10.8	頸部:ヨコナデ 指圧後工具ナデ	暗灰色	口縁部:ハケメ 指圧後工具ナデ	○	○					
19	39	B9	SD1002		弥生	甕	18.0			口縁部:ナデ、ヨコ ナデハケ後ナデ	淡褐色	口縁部:ヨコナデ ハケ、指圧、ナデ	●	●		○	○		
19	40	B8	SD1002		弥生	甕	11.6	10.6		口縁部:ヨコナデ タテハケ、ナデ	灰白色		●	●		○			
19	41	B8	SD1002		弥生	甕	14.8	13.0	7.6	口縁部:ヨコナデ 指圧	暗灰色	ヨコナデ	○	○		○			
20	42	B8	SD1002		弥生へ古墳	甕	13.6	9.9		ナデ	にぶい黄 褐色	ヨコナデ	●	●				外面:黒斑あり	
20	43	B8	SD1002		古墳	甕	14.8	10.8		口縁部:ヨコナデ ナデ	褐色	指圧、ナデ	●	●		○	○		
20	44	B8	SD1002		古墳	甕	16.1	12.3	7.4	ヨコナデ	淡黄色	指圧後ヨコナデ	○	○		○		黒斑あり	
20	45	B8 SD1002		弥生	甕		15.6	16.0		口縁部:ヨコナデ タテハケ、ナデ	にぶい黄 褐色	工具ナデ、ナデ	●	●		○	○		
20	46	B8	SD1002		弥生	甕	15.6		10.1	縦ハケ、回転ヨコナ デ	淡褐色	回転横ナデ、ヘラ ケズリ後ナデ	○	○					
20	47	B8	SD1002		弥生へ古墳	甕	13.0	19.2		頸部:ヨコナデ タテハケ(9本/cm)、 ヨコナデ	にぶい黄 褐色	ヘラ状工具ナデ	●	●		●			
20	48	B8	SD1002		古墳	甕		17.8	14.5	タテハケ	暗灰黄色	口縁部:ヨコナデ 指圧、ヘラケズリ	○	○					
20	49	B8	SD1002		弥生へ古墳	甕	19.8	15.0		口縁部:ヨコナデ タテハケ(4本/cm)	灰黄褐色	ナデ	●	●		○	○		
20	50	B9	SD1002		弥生	甕	21.1	16.7	5.8	口縁部:ヨコナデ 工具ナデ	灰白色	指圧、工具ナデ	○	○					
20	51	B8	SD1002		古墳	甕	15.6			タテハケ、ヨコナ デ、ミガキ	にぶい黄 褐色	ヨコナデ	○	○				内面:指圧痕らしき 痕あり 赤色顔料あり	
20	52	B8	SD1002		古墳	甕	17.2			口縁部:ヨコナデ ヘラミガキ後ナデ	淡褐色	口縁部:ヨコナデ ヘラミガキ後ナデ	●	●					
20	53	B8	SD1002		弥生へ古墳	甕	17.2	14.2		口縁部:ヨコナデ タテハケ(12本/cm)	灰白色	指圧、タテハケ、ナ デ	●	●		○	○		
20	54	B8	SD1002		弥生へ古墳	甕				ナデ	灰白色	ナデ	●	●		○	○		
20	55	B8	SD1002		弥生へ古墳	甕				口縁部:ヨコナデ 沈殿2本 ナデ	明褐色	ナデ	●	●		●	●		
20	56	B8	SD1002		弥生へ古墳	甕			14.6	不明	にぶい黄 褐色	不明	○	○					
20	57	B8	SD1002		古墳	甕	11.2	8.8	6.6	口縁部:ヨコナデ 指圧	淡黄色	指圧	○	○		○		内側にハケ目らし き痕あり	
20	58	B8	SD1002		古墳	甕	9.8	10.3	8.6	工具ナデ	淡黄色	指圧後ナデ	○	○		○			
20	59	B9	SD1002		古墳	甕			7.4	口縁部:ヨコナデ タテハケメ	暗灰色にぶい 褐色	口縁部:工具ナデ 指圧	○	○		○	○		
20	60	B8	SD1002		古墳	甕		2.2	8.4	ヘラケズリ、指ナデ	暗灰色	ナデ	○	○					
21	61	B9	SD1002		弥生	甕	20.4	15.6	3.1	ヨコナデ	淡黄褐色	ヨコナデ							
21	62	B8	SD1002		弥生	甕	18.8	13.8		工具ナデ、ヨコナデ	灰白色	工具ナデ、ヨコナ デ	●	●		○			
21	63	B8	SD1002		弥生	甕	14.3			ヨコナデ	褐色	ヨコナデ	○	●		○		頸部にハケメ残る	
21	64	B8	SD1002		弥生	甕	13.2			口縁部ヨコナデ ハケメ、ヨコナデ	にぶい黄 褐色	工具ナデ	○	○		○	○		
21	65	B8	SD1002		弥生	甕				口縁部ヨコナデ、ハ ケメ、ナデ	にぶい黄 褐色	ヨコナデ	●	●		○			

表15 藤原友田遺跡遺物観察表⑤(土器・陶磁器)

押印番号	番 号	区 域	遺 構 番号	取 上 り 番 号	時 期	器 種	法 量 (cm) () は復元径			外面の文様・調整	色 調	内面の文様・調整	胎土(○:多い、△:含む、○:わずかな 角石 灰 質 色 字 号 研 色 字 号 其 他				備 考	
							口径	底 径	器 高				角 石	灰 質	色 字 号	研 色		其 他
21	66	B8	SD1002		弥生	甕				ヨコナデ	にぶい黄褐色	ヨコナデ	○●		○			
21	67	B8	SD1002		弥生	甕				ヨコナデ	明黄褐色	ヨコナデ	○●	○	○		口縁部	
21	68	B8	SD1002		弥生	甕		29.8	27.8		口縁部:ナデ、タテハケ後ヨコナデ ナメハケ後ナデ (11本/cm)	橙褐色	口縁部:ナデ、ヨコナデ ナメハケ後ナデ	○●		○●		
21	69	B9	SD1002		弥生	甕		2.5	2.1		ハケ状工具によるナデ、ナデ	淡橙褐色 暗褐色	指圧、ナデ	○●		○		内面:黒斑あり
21	70	B8	SD1002		弥生	甕		3.7	2.7		指圧、指ナデ	にぶい橙褐色	指圧	○●				
21	71	B8	SD1002		弥生	甕		2.6	3.9		指圧、ハケメ	赤褐色	指圧ナデ	○●				
21	72	B9	SD1002		弥生終末	甕		3.8	3.8		ナデ	暗褐色 黒色	指圧、ナデ	○●		○		黒斑あり
21	73	B9	SD1002		弥生	甕		2.5	6.0		ナデ	淡橙褐色	指圧後ケズリ	○●				黒斑あり
21	74	B9	SD1002		弥生終末	甕		2.2	4.0		ナデ	にぶい黄褐色	ケズリ	○●		○		内面全面に黒斑あり
21	75	B9	SD1002		弥生終末	甕		3.7	6.0		ナデか? (剥離している)	橙褐色	指圧後ナデ	○●		○		黒斑あり
21	76	B9	SD1002		弥生終末	甕		2.5	5.6		工具によるナデ	橙褐色 淡橙褐色	指圧後ケズリ	○●		○		スス付着
21	77	B8	SD1002		弥生	甕		1.9	10.2		ハケメ後ナデ	黒褐色	ハケメ後ナデ	○●		○		
21	78	B8	SD1002		弥生	甕		2.1	5.4		タテハケメ	にぶい黄褐色	ナデ	○●		○		スス付着
21	79	B8	SD1002		弥生	甕		2.0	8.1		タテハケメ	暗灰褐色	ナメハケメ、ナデ	○●		○		
21	80	B8	SD1002		弥生	甕		7.8	2.9		ハケメ、ナデ	淡黄色	指圧、ハケメ	○●				砂粒多い
21	81	B8	SD1002		弥生	甕			7.4		摩滅により不明	灰黄色	ハケメ	○●△				
21	82	B8	SD1002		弥生→古墳	甕		3.5	10.2		ナデ	淡黄褐色 淡橙褐色 暗褐色	ナデ	○●		○		調整が激しい、黒斑あり
21	83	B8	SD1002		弥生	甕		3.8	12.4		タテ方向のナデ	暗灰黄色	ヘラケズリ	○●				
22	84	B8	SD1002		卯月	高杯		20.8		3.4	横ハケ、指圧後ハケ	淡褐色	横ハケ後ナデ、ナデ	○●○				
22	85	B8	SD1002		弥生	高杯			6.1		タテハケ後横ナデ (6本/cm)、ヨコナデ	淡褐色	タテハケ後横ナデ (6本/cm)	○●○				
22	86	B8	SD1002		古墳	高杯					口縁部:ヨコナデ 底部:ナデ後ヨコ方向のミガキ ヨコナデ・ハケ後ミガキ、 ハケ・ナデ後ミガキ	暗赤褐色	口縁部:ヨコナデ後ミガキ ハケ・ナデ後ミガキ	○●		○		内外ともに丹塗りあり
22	87	B9	SD1002		弥生	高杯					ヨコナデ	淡黄褐色		○△△				丹塗り
22	88	B9	SD1002		古墳	高杯					ナデ、ヨコハケ(11本/cm)	淡黄褐色	ヨコハケ(11本/cm)					
22	89	B8	SD1002		弥生	高杯					タテハケ、ナメハケ	淡褐色	ナデ	○●○△				下方に穿孔が2つあり
22	90	B9	SD1002		弥生	高杯						淡黄白色	ヘラミガキ	○●				丹塗り
22	91	B8	SD1002		弥生	高杯			13.8		ヘラミガキ、縦ハケ後ナデ、ナデ	淡明褐色	しぼり、ヨコナデ	○●○				下方に穿孔が3つあり

表16 藤原友田遺跡遺物観察表⑥(土器・陶磁器)

調査 番号	番 号	区 域	遺 構	取り上 げ番号	時 期	器 種	量 (cm) ()は復元径	口 径	底 部	器 高	外面の文様・調整	色 調	内面の文様・調整	胎土(●:多い、○:含む、△:わずかな角閃石、長石、赤色鉄質、黒色鉄質)	備 考
22	92	B8	SD1002		弥生	高杯		4.2	8.5		タテハケ、ヘラミガキ	淡褐色	未調整、ナデ	○ ○ ○	
22	93	C9	SD1002		弥生	高杯					ヘラミガキ	黄褐色		○ △	穿孔1ヶ所、SD1004か?
22	94	B8	SD1002		弥生	高杯	4.7				タテ方向のヘラミガキ、ヨコナデ	淡褐色	しぼり痕、丁寧なヘラミガキ	○ ○ ○	
22	95	B8	SD1002		弥生	高杯		5.1	11.4		ヘラ状工具によるナデ	黄褐色	ナデ、しぼり痕	○ ○ ○	
22	96	B8	SD1002		弥生	高杯		3.4	10.7			黄褐色	ナデ	○ ○	穿孔:2ヶ所
22	97	B8	SD1002		弥生	高杯		4.0	9.9		ヘラ状工具によるケズリ	淡黄白色	ナデ	○ ○	
22	98	B9	SD1002		弥生	高杯	4.6				ヘラミガキ後ヨコナデ、ヘラミガキ後丹塗り	淡褐色	ヘラミガキ後ナデ、タテ方向のケズリ後ナデ	○ ○ ○	○
22	99	B9	SD1002		弥生	高杯	4.8		11.8		タテハケメ(11本/cm)後ヘラミガキ	淡黄褐色		○ △	
22	100	B9	SD1002		弥生～古墳	高杯	3.7				ヘラミガキ、タテ方向のミガキ後ナデ	淡褐色	ナデ、しぼり痕	○ ○ ○	
22	101	B9	SD1002		弥生～古墳	高杯		18.7	13.1		ハケメ後ヘラミガキ	暗赤褐色	ナデ、しぼり痕	○ ○	内外ともに丹塗り、穿孔4ヶ所
22	102	B9	SD1002		古墳	高杯		19.6			ヘラミガキ後ヨコナデ、ヘラミガキ後ナデ	淡褐色	指圧ヨコナデ	○ ○	○
22	103	B8	SD1002		古墳?	高杯		4.1			縦ハケ後ナデ	淡褐色	縦ハケ、横ハケ	○ ○	穿孔あり
23	104	B9	SD1002		弥生～古墳	小型鉢	11.4	11.8	9.4		ナデ、ナデ後ミガキ	淡褐色	ケズリ後ヨコナデ、工具ナデ	○ ○ ○	外面:丹塗りあり
23	105	B8	SD1002		弥生～古墳	鉢	11.6	12.0	8.5		タテハケメ	灰黄色	指圧	○ ○	○
23	106	B9	SD1002		弥生～古墳	鉢	10.6				ヨコナデ	淡黄色	指圧	○ ○	
23	107	B9	SD1002		古墳	脚付鉢	13.6	7.4	11.3		口縁部:ヨコナデヘラミガキ、ヘラケズリ	浅黄色	ナデ	○ ○	内外とも丹塗り
23	108	B8	SD1002		古墳	脚付鉢	16.0	10.0	9.4		口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ後ナデ、ヘラ状工具ナデ	暗灰褐色	口縁部:ヨコナデヘラミガキ後ナデ	○ ○ ○	口縁部に打ち欠けあり、脚部後付け
23	109	B8	SD1002		古墳	鉢		2.3			指ナデ	にぶい褐色	指ナデ	○ ○ ○	全面に丹塗りあり
23	110	B8	SD1002		古墳	鉢	14.2	14.0			口縁部:ヨコナデタテハケ	にぶい黄褐色	ヘラミガキ後ナデ	○ ○ ○	
23	111	B8 B9	SD1002 SD1002		古墳	鉢	12.5	7.3			口縁部:ヨコナデ、タテハケ(7本/cm)	灰黄色	ヘラ状工具ナデ	○ ○ ○	
23	112	B8	SD1002		古墳	鉢もしくは埴	17.8	12.8			口縁部:ミガキ、タテハケ(9本/cm)、ヨコナデ、ナデ	にぶい黄褐色	工具ナデ	○ ○ ○	内外:口縁部に丹塗りあり
23	113	B8	SD1002		古墳	鉢もしくは埴					口縁部:ヨコナデタテハケ(6本/cm)、ナデ	にぶい黄褐色	指圧後ナデ	○ ○ ○	
23	114	B8	SD1002		弥生～古墳	鉢	14.8				口縁部:ヨコナデナデ	灰白色	ナデ	○ ○ ○	
23	115	C2	SD0001	No.2	弥生	鉢	20.0	16.9	16.4		ヨコナデ、縦ハケ(5本/cm)、ナデ	淡褐色	ヨコナデ、ナデ、指圧	○ ○ ○	
23	116	B9	SD1002		弥生	鉢					ナデ	淡黄褐色	ナナメハケメ6本/cm	○ ○ ○	
23	117	B8	SD1002		弥生～古墳	鉢	20.9	18.0	5.7		ヨコナデ	浅黄褐色	指圧後ナデ	○ ○ ○	
23	118	B8	SD1002		弥生	鉢	25.2	7.5			ハケメ	暗灰色	工具ナデ	○ ○ ○	
23	119	B9	SD1002		弥生	鉢	23.5	21.1	7.9		ハケメ後ヨコナデ	にぶい褐色	ハケメ後ヨコナデ、ヨコナデ	○ ○ ○	

表17 藤原友田遺跡遺物観察表⑦(土器・陶磁器)

探検 番号	番 号	区 域	遺 構	取り上 げ番号	時 期	器 種	法量 (cm) () は復元径			外面の文様・調整 色	内面の文様・調整 色	胎土(◎:多い、○: 含む、△:わずかに 含む)				備 考		
							口径	底径	高さ			陶石	灰石	灰土	灰砂		その他	
23	120	B8 B9	SD1002 SD1002		弥生	鉢	24.2	22.0		口縁部:ハケ ハケ後ナデ	淡褐色	口縁部:ハケ ハケ後ナデ	◎	◎	○	◎	内面:丹塗り。丹塗り用塗料入れ。外面にも点々があるがぼれたものか?	
23	121	B8	SD1002		弥生	台付鉢			6.5	ハケメ後ヘラミガキ	灰黄色	深いハケメあり、指圧	○	○				
23	122	B8	SD1002		弥生	台付鉢			4.0	ヘラミガキ	灰黄色	ヘラミガキ	○	○		○	丹塗りあり	
24	123	B8	SD1002		弥生	甗		2.5	12.8	タテハケ後ナデ	淡褐色	ナメハケ後ナデ (6本/cm)、しぼり	◎	◎	◎	○	底面に成形時の穿孔あり	
24	124	B8	SD1002		弥生	甗			15.0	ヘラケズリ	灰黄色	指ナデ、指圧	○	○				
24	125	B9	SD1002		弥生	甗		2.2	10.0	ナデ	淡黄褐色	不定方向のケズリ、指圧	◎	◎		◎	底部に穿孔あり、黒斑あり	
24	126	B8	SD1002		弥生	文脚			14.4	タテハケ後ナデ、 ヘラ状工具ナデ	淡褐色 緑褐色	ナデ、ヘラ状工具 ナデ	◎	◎	◎	○		
25	1	B9 C9 B9	SD1004 №12 SD1004 SD1004	ベルト内	弥生	複合口縁壺	18.4			口縁部:ヨコナデ、 タテハケ後ヨコナデ、 タテハケ両ハケ	淡黄色	口縁部:ヨコナデ タテハケ、ヨコ 方両ハケ	◎	○	○			
25	2	C9	SD1004		弥生	複合口縁壺	26.8	7.1		ハケメ後ナデ	にぶい褐色	ヘラケズリ	○	○			黒斑あり	
25	3	C9	SD1004		古墳	複合口縁壺				ハケメ (10本/cm)	にぶい黄褐色	ハケメ (5本/cm)	◎	○		○	外面:スス付着	
25	4	B9	SD1004		古墳	複合口縁壺			7.7	ナデ	浅黄褐色	ナデ	◎	◎	◎	◎	新付突帯	
25	5	C9	SD1004		古墳	複合口縁壺				タテハケ、ヨコナデ	浅黄褐色	平滑なナデ	◎	○	○	○		
26	6	B9 B9	SD1004 SD1004		古墳	複合口縁壺	24.0	17.2		ナメハケ後ナ デ、ナデ	浅黄褐色	指圧、ナデ	◎	◎	△	○		
26	7	C9	SD1004		弥生	壺			13.6	タテハケのヘラケ ズリ	にぶい黄褐色	工具によるナデ	◎	◎		◎	底部に黒斑あり	
26	8	C9	SD1004		弥生	壺			15.3	タテハケ(4本/cm)、 ナデ	にぶい黄褐色	工具ナデ、指圧	◎	◎		○		
26	9	C9	SD1004		弥生	小壺壺				ヨコナデ、ヘラミ ガキ	淡黄褐色	ヨコナデ、ヘラナ デ	○	○				
26	10	C9	SD1004		弥生	小壺壺	7.5	11.3		指ナデ、タテハケ、 ミガキ	にぶい褐色	指ナデ、タテハケ	○	○		○	黒斑あり	
26	11	C9	SD1004		古墳	土師器小壺			6.1	口縁部:ヨコナデ タテハケのヘラミ ガキ	にぶい褐色	口縁部:ヨコナデ ヨコ方両ハケ、タ テハケのヘラミガキ	◎			○		
26	12	C9	SD1004		古墳	壺	5.2	12.8		ハケ後ナデ、ヘラ ケズリ、指圧	にぶい黄褐色	指圧、ナデ、しぼり	○	○	○	○		
26	13	B9	SD1004 №6		古墳	壺	17.2	21.7	31.8	口縁部:ヨコナデ ナメハケのハ ケ、ナデ	褐色 赤褐色	口縁部:ヨコナデ 指圧、板状工具に よるナデ	◎	◎		○	内面にコケ、中位に スス、下位に被熱赤 変	
26	14	C9	SD1004		古墳	壺	8.0	1.6	20.9	口縁部:ヨコナデ 一部タテハケ残る	浅黄色	口縁部:ヨコナデ ヘラケズリ	◎		○	◎	二次被熱、黒変あり	
27	15	C9	SD1004		弥生	甗	12.1	22.0		タテハケ(7本/cm)	にぶい黄褐色	ヨコハケ(7本/cm) 後ヘラケズリ	◎	○	◎	◎	二次被熱、黒変あり	
27	16	C9	SD1004		古墳	甗	12.0			ハケ後工具調整	灰黄褐色	ヘラケズリ後ヘラ ミガキ	○			○		
27	17	C9	SD1004		古墳	甗			16.0	17.2	口縁部:ヨコナデ ハケ後ナデ	浅黄褐色 灰褐色	口縁部:ヨコナデ ヘラケズリ	◎	◎	◎	◎	外面:スス付着
27	18	C9	SD1004		古墳	甗			21.0	12.4	口縁部:ヨコナデ、 タテハケ(4本/cm)、 工具のあたり痕あり	赤褐色	口縁部:ヨコハケ ヘラケズリ、指圧、 ナデ	◎	○	◎	◎	
27	19	B9	SD1004		弥生	甗				胴部:ヨコナデ ナデ	灰黄色	胴部:ヨコナデ 1平なナデ、指圧	○	○	○		スス付着	
27	20	C9	SD1004		弥生	甗もしくは壺	12.4	12.3		ハケメ (8本/cm)	浅黄色	口縁部:ヨコナデ 指圧	◎	◎	◎	◎	外面:スス付着	

表18 藤原友田遺跡遺物観察表⑧(土器・陶磁器)

検出 番号	番 号	区 域	遺 構	取り上 げ番号	時 期	器 種	法量 (cm) () は復元径		外面の文様・調整	色 調	内面の文様・調整	胎土(○:多い,○: 含む,△:わずめ) 焼成 温度 状態	備 考
							口径	底部 高さ					
27	21	B9	SD1004	№10	弥生	土師器甕	13.5		口縁部:ヨコナデ タテ方向のハケ	淡黄色	口縁部:ヨコナデ タテ方向のナデ	○●○	二次加熱あり
27	22	C9	SD1004		弥生	甕	17.4		ヨコナデ, タテハ ケ後ナデ	にぶい赤 褐色	ヨコナデ, 指正	○●○	
27	23	B9	SD1004		弥生	甕	17.2	8.3	口縁部:ヨコナデ ナデ	にぶい黄 褐色	口縁部:ヨコナデ 指正	○●○	外面:スス付着
27	24	C9	SD1004		弥生	甕	9.8	5.8	タテハケ	にぶい黄 褐色	ミガキ, ヘラケズ リ	○●○	
27	25	C9	SD1004		弥生	甕	16.4	14.6	口縁部:ヨコナデ タテ方向のハケ後 ナデ	灰褐色	口縁部:ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ	△○●	二次加熱あり
28	26	C9	SD1004		弥生	甕	15.4	4.7	口縁部:ヨコナデ 後ヘラミガキ, ヘ ラミガキ	にぶい黄 褐色	口縁部:ヨコナデ 後ヘラミガキ, 平 滑なナデ	○●○	
28	27	C9	SD1004		弥生	甕	15.8	5.5	口縁部:ヨコナデ タテハケ(10本/cm)	浅黄色	口縁部:ヨコナデ 指正	○●○	二次加熱
28	28	C9	SD1004		弥生	甕	17.7	8.0	口縁部:ヨコナデ ナメハケメ(8本 /cm)	浅黄色	ナデ, 指正	○●○	
28	29	C9	SD1004		弥生	甕		6.5	口縁部:ヨコナデ 一部タテハケ残る	浅黄色	口縁部:ヨコナデ ヘラケズリ	○●○	
28	30	C9	SD1004		弥生	甕		6.4	口縁部:ヨコナデ 一部タテハケ残る	浅黄色	口縁部:ヨコナデ ヘラケズリ	○●○	
28	31	B9	SD1004		弥生	甕	17.6	2.9	ヨコナデ	浅黄褐色	ヨコナデ	○●○	
28	32	B9	SD1004		弥生	甕	19.2	3.1	ヨコナデ, タテハ ケ(6本/cm)	明褐色	ヨコナデ	○●○	
28	33	B9 B9	SD1004 SD1004	ベルト	弥生	甕	19.4	3.5	ヨコナデ	にぶい褐 色	ヨコナデ	○●○	
28	34	C9	SD1004		古墳	甕	21.4	4.3	口縁部:ヨコナデ 一部タテハケ残る	浅黄色	口縁部:ヨコナデ ヘラケズリ	○●○	
28	35	B9	SD1004		古墳	甕		11.4	口縁部:ヨコナデ ナメハケ	にぶい黄 褐色	タテナデ	○●○	
28	36	C9	SD1004		古墳	甕		3.6	タテハケ後ナデ	灰褐色	ナデ	○●○	
28	37	B9	SD1004		弥生	甕		2.9	タテハケ(8本/cm) 後ナデ	にぶい黄 褐色	ナデ, 指正	○●△	
28	38	C9	SD1004		弥生	甕		3.2	タテ方向のハケメ	にぶい黄 褐色	工具によるナデ	○●○	大型粒子が多く時 期が異なる可能性 あり
28	39	C9	SD1004		弥生	甕		2.2	タテ方向のハケメ (3本/cm), ナデ	浅黄褐色	工具による平滑な ナデ	○●○	外面:スス付着
28	40	C9	SD1004		弥生	甕		13.3	タテ方向のハケメ (6本/cm), ナデ	浅黄褐色	ナデ, 指正	△○●	
29	41	B9	SD1004		弥生	甕		2.8	平坦なナデ	にぶい黒 色	ナデ, 指所残る	○●○	
29	42	C9	SD1004		弥生	甕		4.8	工具ナデ	浅黄褐色	工具ナデ	○●△	
29	43	C9	SD1004		弥生	甕		3.6	タテハケ後ナデ	灰褐色	工具ナデ	○●○	
29	44	B9	SD1004	№12	弥生	甕			タテハケ後ヘラミ ガキ	浅黄褐色 黒色	ヘラケズリ後指所 残る	○●○	
29	45	C9	SD1004		弥生	甕		20.7	不定方向のハケメ (4本/cm)	にぶい黄 褐色	工具ナデ	○●○	外面:スス付着
29	46	B9	SD1004		弥生	甕		11.3	タテハケ, ミガキ	灰黄褐色	ヘラケズリ, 指所 残る	○●○	二次加熱の黒炭あ り
29	47	C9	SD1004		弥生	甕		5.0	タテハケ, ナデ	灰白色 黒色	タテナデ, 指ナデ	○●○	
29	48	C9	SD1004		弥生中前期 後半	甕		6.1	ナデ, 指正	にぶい橙 色	ナデ	○●○	

表19 藤原友田遺跡遺物観察表⑨(土器・陶磁器)

調査 番号	区 域	遺 構	取り上 げ番号	時 期	器 種	法量 (cm) () は取元径			外面の文様・調整	色 調	内面の文様・調整	胎土 (○:多い, ○:含む, △:わずかに含む)					備 考
						口径	底径	高さ				角 質 土	石 質 土	灰 質 土	黒 土	その他	
30	49	C9	SD1004	弥生	高杯	25.8	7.7		口縁部:ヨコナデハケメ(7本/cm)、指圧	にぶい黄褐色	口縁部:ヨコナデヘラケズリ後ナデ、指圧	○					
30	50	B9	SD1004	弥生	高杯	30.0	6.8		ヨコナデ、ハケメ(10本/cm)、ヘラミガキナデ、ヘラミガキ	灰白色	ヨコナデ、ナメハケ、ヘラミガキ	○	○			○	
30	51	C9	SD1004	弥生	高杯	19.2			タテハケメ後ナデ、ヨコナデ	にぶい黄褐色	ナデ	○	○			○	
30	52	C9	SD1004	弥生	高杯				ヨコナデ	淡黄褐色	ヨコナデ	○	○			○	丹塗り
30	53	C9	SD1004	弥生	高杯				ミガキ、タテ方向のハケメ(4本/cm)	赤褐色	ナデ、しぼり痕	○	○			○	全体に丹塗り 内面:杯部に黒斑あり
30	54	C9	SD1004	弥生	高杯			10.1	タテハケ	にぶい黄褐色	しぼり痕、ナデ	○	○	○		○	
30	55	B9	SD1004 №9	弥生	高杯			10.0	タテ方向のヘラミガキ	明黄褐色	ハケ	○	○			○	
30	56	C9	SD1004	弥生	高杯			11.2	摩滅している、ナデ	淡黄色	しぼり痕、ナデ	○	○	○		○	
30	57	B9	SD1004	弥生	高杯	4.5		10.7	ヘラミガキ	明褐色	しぼり痕、巻き上げ痕	△	△				丹塗り
30	58	B9	SD1004 №8	弥生	高杯か台付鉢		12.4	6.5	ヨコナデ、ハケメ(10本/cm)後ナデ消し	灰白色	ヨコナデ、ナデ、指圧	○	○			○	
31	59	C9	SD1004	弥生へ古墳 鉢		10.0		7.1	不明	にぶい褐色	ヘラケズリ	○	○			○	
31	60	C9	SD1004	弥生	台付鉢		9.0	2.5	ナデ、タテハケ	淡褐色	ナデ、ヨコナデ	○	○			○	丹塗り
31	61	C9	SD1004	弥生	鉢	11.6		10.5	ハケ後ナデ	にぶい褐色	土具ナデ	△				○	二次加熱が激しく、 外面が解けて赤と 黄色の付着あり
31	62	C9	SD1004 №1	弥生	鉢	12.5	4.4	14.3	口縁部:ヨコナデ指圧、ヘラミ具によるナデ、ナデ	赤褐色	口縁部:ヨコナデヘラミ具によるナデ	○	○			○	二次加熱あり
31	63	B9	SD1004 №7	弥生	鉢	11.8	2.5		口縁部:ヨコナデヘラミガキ、ナメ方向のナデ	淡黄色	口縁部:ナデ指圧、敷状ミ具によるナデ、ヘラケズリ	○	○			○	口縁部を全て打ち 欠き
31	64	C9	SD1004	弥生	台付鉢	12.0			口縁部:ヨコナデナデ後ヘラミガキ	淡黄色	口縁部:ヨコナデナデ	○	○				外面:黒斑あり
31	65	C9	SD1004	弥生	台付鉢		15.9		口縁部:ヨコナデナデ後ミガキ、ナデ	淡黄色	口縁部:ヨコナデミガキ、ヘラケズリ、ナデ	○	○			○	
31	66	C9	SD1004	弥生	台付鉢	19.3	15.0	15.6	ハケメ	淡黄褐色	タテ方向ヘラケズリ、ヨコナデ	○	○			○	黒斑、二次焼成あり
31	67	C9	SD1004 №5	弥生	台付鉢	18.2	13.8	11.1	口縁部:ヨコナデタテ方向のハケ(9本/cm)、ハケ後ナデ(9本/cm)	灰白色 赤褐色	口縁部:ヨコナデ工具による丁寧なナデ、工具によるナデ	○	○			○	黒斑あり
31	68	C9	SD1004	弥生	鉢	21.6		8.3	口縁部:ヨコナデ不定方向のハケ、ナメ方向のハケ	灰白色 赤褐色	口縁部:ヨコナデタテ方向のヘラミガキ、タテ方向のナデ	○	○			○	外面全面にスス付 着
31	69	B9 C9	SD1004 №6 SD1004	弥生	台付鉢	22.4		14.4	ハケメ(10本/cm)	にぶい黄褐色 黒褐色	ミガキ	○	○			○	炭 灰 時に口縁を 2ヶ所欠く
31	70	C9	SD1004	弥生	鉢	24.0	19.8	16.8	タテハケメ(8本/cm)、ヨコナデ	黄褐色	土具ナデ、ヨコナデ	○	○			○	
32	71	C9	SD1004	弥生へ古墳 碗		12.8		6.7	工具によるナデ、手持ちヘラケズリ	にぶい褐色	土具によるナデ	○	○			○	丹塗り、内外ともに 丹塗りあり
32	72	C9	SD1004	弥生へ古墳 碗		13.4	5.1		ヨコナデ	赤褐色	ヨコナデ	○	○			○	
32	73	C9	SD1004	弥生へ古墳 鉢		7.4		3.4	指圧、未調整	にぶい黄褐色	指圧	○	○			○	
32	74	C9	SD1004	弥生へ古墳 碗					ヨコナデ、ヘラケズリ		ヨコナデ、ハケメ						

表20 藤原友田遺跡遺物観察表⑩ (土器・陶磁器)

探 査 番 号	区 域	遺 構	取り上 げ番号	時 期	器 種	法量 (cm) () は復元径			外面の文様・調整	色 調	内面の文様・調整	施土(○:多い, ○:含む, △:わずか) 角閃石 長石 鉄質土 黒土 灰土				備 考
						口径	底部	器高				角閃石	長石	鉄質土	黒土	
32	75	80	SD1004	弥生へ古墳	輪			5.3	タテ方向のヘラケズリ	にぶい黄褐色	ヨコ方向のヘラケズリ	○		○	○	
32	76		SD1004	弥生へ古墳	蓋	9.0		10.2	ヘラミガキ	にぶい黄褐色	ヨコナデ、指圧	○	○	○		黒底あり、先端部に穿孔あり
32	77	C9	SD1004	弥生	器台	25.2	9.4	21.3	口縁部:タテハケ後ナデ、波状文・2列の浮文、タテハケ後ヘラミガキ、ヨコハケ後ヘラミガキ	淡青色 淡褐色	口縁部:ヨコハケ後ナデ、ヨコハケ、ナメハケ	●	●			黒底あり
32	78	C9	SD1004	弥生へ古墳	支脚				タテハケ、平行タタキ	にぶい褐色	工具ナデ、絞リ痕、指圧	○	○	○	○	被熱のため赤変
35	1	O6	SD0058	古墳	壺	(14.0)		22.2	口縁部:ヨコナデハケ状工具によるナデ	淡褐色 褐色 褐色 褐色	口縁部:ヨコナデ不定方向のケズリ	●	●	○	○	スス付着
35	2	O6	SD0058 カマド No.4 No.6 No.8 No.10 No.13	古墳	甗	(28.0)	(8.4)	24.1	口縁部:ヨコナデケズリ、指ナデ	淡褐色 褐色 褐色 褐色	口縁部:ヨコナデ指圧後ケズリ、指ナデ	●	●	○	○	スス付着 同一胴体:O5 カマド No.1・2・5・7・8
35	3	O6	SD0058	古墳	坪	(14.0)		5.2	口縁部:ヨコナデヘラケズリ	赤色 時褐色 黒色	口縁部:ヨコナデハケ状工具によるナデ	●	●			内外全面に丹塗りあり
35	4	O6	SD0058	縄文	深鉢				朱紋文	淡褐色	朱紋文	○				
35	5	O6	SD0058	弥生	壺		2.6		ハケミ後ナデ(5本/cm) 底部:ナデ	にぶい褐色 褐色	ハケミ後ナデ(5本/cm)	○	○			
35	6	O6	SD0058	弥生	器台				ハケミ後ナデ(5本/cm)	褐色	ナデ	○	○		●	
35	7	O6	SD0058	弥生へ古墳	蓋				ヨコナデ	褐色	ヨコナデ	○				黒底あり
35	8	O6	SD0058	弥生へ古墳	壺	15.2			ナデ	淡黄褐色	ナデ	○	○	○		
35	9	O6	SD0058	中世	皿				ヨコナデ	褐色	ヨコナデ	○				
35	10	O6	SD0058	中世	坪		9.2		口縁部:回転ヨコナデ、底部:回転赤きり	褐色	回転ヨコナデ、指ナデ	○			○	
35	11	86	SD0058	中世	瓦質土器鉢				ヨコナデ	灰色	ヨコナデ				○	黒底あり
38	1	C5	SD0084 No.16	古墳	須恵器灰皿	13.0		3.8	回転ヘラ切り	暗灰色	ヨコナデ					
38	2		SD0084	古墳	須恵器坪	11.8		4.9	回転ヘラケズリ、ナデ、回転ヨコナデ	黒灰色	回転ヨコナデ	●	○			
38	3	C5	SD0084 No.13	古墳	小皿	10.2	13.7	12.8	ヨコナデ	暗灰黄色	指圧、ヨコナデ	○	○			スス付着
38	4	C5	SD0084 No.12	古墳	壺	18.1	16.9	9.5	ハケミ後ヨコナデ	褐色	口縁部:ヨコハケ指圧後ヘラケズリ	○	○			
38	5	C5	SD0084 No.3	古墳	甗	18.8		9.1	タテハケ後ヨコナデ	暗褐色	ヘラケズリ、ヨコハケ	○	○			
38	6	O4	SD0084	古墳	壺	17.5	25.2	16.6	タテハケ、ナメハケ後ヨコナデ	淡褐色	口縁部:ヨコハケヘラケズリ	●	●			SD0083 として取り上げ
38	7	C5	SD0084 No.15	古墳	甗			11.6	タテハケミ (6本/cm)	にぶい黄褐色、にぶい褐色	ヘラケズリ	○	○	○		
38	8	C5	SD0084 No.5	古墳	坪	15.0		4.0	ナデ、ヨコナデ後ヘラミガキ	淡黄褐色	ナデ、ヨコナデ後ヘラミガキ	●	●			
38	9	C5	SD0084 No.1	古墳	須恵器壺				平行タタキ	暗褐色 暗灰色	あて貝痕	○	○	○	○	

表21 藤原友田遺跡遺物観察表①(土器・陶磁器)

探 査 番 号	区 域	遺 構	取 り 上 げ 番 号	時 期	器 種	注 記 ()は復元径	法量 (cm)			外面の文様・調整	色 調	内面の文様・調整	胎土 (○:多い, □:少な, △:わずかな)				備 考
							口径	底径	高さ				左 長 径	右 長 径	底 径	口 縁 径	
42	1	C9	SK1001	古墳	二重口縁壺		17.4	11.6	12.2	ヨコナデ	灰赤褐色	ヘラケズリ、ナデ、ヨコナデ	○	○	○	○	
42	2	C9	SK1001	古墳	壺					ヨコナデ後ヘラミガキ	黄褐色	ヨコナデ後ヘラミガキ	○	○			
42	3	C9	SK1001	古墳	壺				8.3	ナデ	暗褐色 暗灰色	指圧後ナデ	○	○		○	器種不明
42	4	C9	SK1001	古墳	壺		12.4		7.1	ナデ	暗褐色	指圧、ケズリ後ナデ	○	○			口縁はヨコナデ
42	5	C9	SK1001	古墳	壺	(16.2)			4.0	口縁部:ヨコナデ タテハケ(9本/cm) 後ナデ	淡黄褐色	口縁部:ヨコナデ ナデ	○	○			
42	6	C9	SK1001	古墳	高杯		3.9	9.6	5.5	ナデ、ヨコナデ	黄褐色	ヨコナデ	○	○			
44	1	B7	SK1005	弥生	模合口縁壺					縁幅波状文(4条1単位)ヨコナデ、ナデ	灰白色	ナナメ方向のナデ	○	○		○	
44	2	B7	SK1005	弥生	模合口縁壺					縁幅波状文(5条1単位)	淡褐色	ヨコナデ	○	○			外面:丹塗り
44	3	B7	SK1005	弥生	下城式壺					ヨコナデ、ナデ	茶褐色	ヨコナデ、ヨコ方 向のナデ	○	○	△	○	貼付突帯
44	4	B7	SK1005	弥生	壺				3.4	ナナメ方向のハケ (9本/cm)、ナデ	黒褐色	板状工具によるナデ	○	○			
44	5	B7	SK1005	弥生	壺				3.2	板状工具によるナデ、ナデ	淡黄色	ナデ	○	○		○	
44	6	B7	SK1005	古墳	須恵器環					回転ヘラケズリ	灰色	回転ヨコナデ					杯身が歪みは小片のため不明
44	7	B7	SK1005	古墳	須恵器環					回転ヘラケズリ	灰色	回転ヨコナデ					黒色の灰け多い粒子多い。杯身が歪みは小片のため不明
46	1	C3	SK0175	古墳	陶式系壺?					格子目タタキ	淡黄褐色	ナデ	○	○			部分的に褐色
48	1	C8	SK1028	古墳	壺		13.0	16.0		口縁部:ヨコナデ タテハケ後ヨコナデ	赤褐色	口縁部:ヨコナデ 指圧、ヘラケズリ 後ナデ	○	○			二次加熱あり
48	2	C8	SK1028	古墳	壺		12.0	15.9		口縁部:ヨコナデ ハケ後ヨコナデ	淡黄色	口縁部:ヨコナデ ヘラケズリ	○	○			二次加熱あり
48	3	C8	SK1028	古墳	碗		14.3		5.4	ヨコナデ、ケズリ	にぶい橙 色	ヨコナデ、ナデ	○	○	○		
50	1	B5	SK0054	古墳	壺				11.5	ナナメハケメ(8本/cm)、ヘラミガキ	淡褐色 暗褐色 黒色	ナデ、指圧、ヘラミガキ	○	○		○	スス付着、口縁内面 ～外面全面に丹塗 りあり
50	2	B5	SK0055	古墳	壺				17.5	口縁部:ヨコナデ、ナ デ、ナデ後不定方向 のハケ(5本/cm)	淡褐色 暗褐色 黒色	口縁部:ヨコナデ 指圧、不定方向の ケズリ	○	○			スス付着
52	1	SP1092	西壁内	古墳	壺					ヨコナデ	灰黄褐色	ヨコナデ	○	○			
54	1	C9	SP1079	古墳	壺					ヨコナデ	灰黄色	ヨコナデ	○			○	
56	1	C5	SP0105	弥生	壺				6.4	タテ方ヘラミガ キ	黄茶褐色	ナデ後ミヘラガキ	○	○			
57	1	B6 C6	VI層	縄文早期	深鉢					横円押し型文	淡褐色	原体朱灰	○	○	○	○	磨部破損
57	2	B5	VI層	縄文早期	深鉢					押型文	灰褐色	原体朱灰	○	○	○	○	磨部破損
57	3	B5	VI層	縄文早期	深鉢					横円形押型文	淡褐色	ナデ	○	○			磨部破損
57	4	B6	VI層	縄文早期	深鉢					タタキ	黄灰色	不明			○	○	磨部破損
57	5	C4	SK0084	縄文晩期	深鉢					ヨコナデ、貝殻条 文文様	黒褐色	貝殻条文文様	○	○			突帯あり
57	6	D2	SD0001	縄文晩期	深鉢					条痕	灰黒色 淡黄灰色	条痕	○	○		○	黒斑あり

表22 藤原友田遺跡遺物観察表⑫(土器・陶磁器)

種別 番号	番 号	区 域	造 型	取り上 げ番号	時 期	器 種	法尺 (cm) () は復元推			外面の文様・調整 色	内面の文様・調整 色	粘土(○:多い, △:含む, △:わずかに含む)				備 考	
							口径	底部	器高			角四角石	長	村	厚		その他
57	7	B9	SP1048		縄文晩期	深鉢				縄文	暗褐色	条文痕	○	○			
57	8	B8	SD1002		縄文晩期	深鉢				ヨコ方向巻目状痕	暗褐色	ヨコ方向の二枚貝条痕 接合痕	○	○	○	○	
57	9		SD1002		縄文晩期	深鉢				二枚貝条痕	茶褐色	二枚貝条痕	○	○	○	○	S-1002 柄の溝から出土
57	10	B9	SD1002		縄文晩期	深鉢				山形文、二枚貝条痕、縄文	黒褐色	二枚貝条痕	○	○	○	○	
57	11	C5	VI層		縄文晩期	深鉢			2.2	ヨコナデ	暗褐色	条文痕	○	○			
57	12	B8	SD1002		縄文晩期	深鉢				条痕	にぶい橙 色 暗灰色	条痕	○	○			
57	13	B6			縄文晩期	浅鉢				ナデか?	淡褐色	ナデか?	○	○			リボン状突帯あり
57	14	C6	VI層		縄文	深鉢			2.2	ナデ	淡褐色	条文痕	○	○			刻目突帯
58	15	B5	サブトレ		弥生	壺				ナデ	淡褐色			○	○	○	口縁縁、上部:円形浮き文貼付け、側面:彫刻文
58	16		表土		弥生	壺			(19.3)	口縁部:ヨコナデ、波状文、ナデ	淡褐色	ナデ	○	○			上縁突帯貼付け
58	17	C5	VI層		弥生	複合口縁壺				ヨコナデ、波状文	淡褐色	ヨコナデ	○	○			
58	18	C6	VI層		弥生	複合口縁壺			3.7	ヨコナデ	淡褐色	ヨコナデ	○	○			黒斑
58	19	C5	VI層		弥生	複合口縁壺				ヨコナデ、波状文	淡褐色	ヨコナデ	○	○			
58	20	南区			弥生	直口壺				ヨコナデ	淡褐色	ヨコナデ	○				丹塗り
58	21	南区			弥生	壺				ヨコナデ、ナデ	淡黄褐色	ナデ	○	○			貼付け刻み突帯
58	22	南区			弥生	壺			3.8	ナデ	淡黄褐色	ナデ	○				
58	23	C5		検出時	弥生	長頸壺	6.7	15.5	18.3	口縁部:ヨコナデ ナデ後ヘラミガキ	灰白色	口縁部:ヨコナデ ナデ後指圧、ナデ	○	○		○	黒斑
58	24		東壁 No.3	占墳	壺				(8.8)	口縁部:ヨコナデ タテハケ(7本/cm)	淡褐色	ヨコナデ、指圧と ナデ	○	○		○	
58	25	C9		東壁	壺		13.4	16.0		口縁部:ヨコナデ 「草」ナデ	褐色	口縁部:ヨコナデ 板状工具によるナデ	○	○		○	外面:スス付着
59	26	南区			弥生	壺				ナデ	橙褐色	ヨコナデ、ナデ	○	○	○		
59	27	B6 C5	VI層 VI層		弥生中期	壺			(7.1)	タテハケメがわずかに残る 底部:ナデ	淡灰褐色	平滑なナデ	○	○	○	△	
59	28	C5			弥生	壺			3.7	2.5	ナデ	淡黄褐色	ヘラナデ	△	△		
59	29	C5	VI層		弥生	壺			2.6	5.9	ナデ	赤褐色	ナデ	○	○		
59	30	C5			占墳	壺				18.2	ハケメ(9~10本/cm)	淡黄褐色	ナデ	○	○		
59	31	B9			弥生	壺	12.8	2.2	16.7	口縁部:ヨコナデ タテハケの工具ナデ	淡黄褐色	口縁部:ヨコナデ ナデ、ハケメ	○	○			
59	32	B6	VI層		弥生	壺			1.2	2.7	工具によるナデ	淡黄褐色	工具によるナデ	○	○	○	○
59	33	B6	サブトレ		弥生~占墳	壺					ヨコナデ、ヘラ ズリ後ナデ	淡黄褐色	指圧後ナデ	○	○	○	
59	34	C5	VI層		弥生	壺			(13.2)	3.6	タテハケ、ヨコナ デ	淡赤褐色	タテハケ、ヨコナ デ	○	○		

表23 藤原友田遺跡遺物観察表③(土器・陶磁器)

調査 番号	区 域	遺 構	取り上 げ番号	時 期	器 種	法量 (cm) () は復元径			外面の文様・調整 色	内面の文様・調整 色	胎土(○:多い, △:わずかに 含む、石、灰、瓦、土、その他)							備 考
						口径	底部	器高										
59	35	南区		古墳	甕				口縁部:ナデ ハケメ	淡褐色	ヘラケズリ	○	○					
59	36	C9	東壁	古墳	甕	(17.0)			口縁部:ヨコナデ 底面:淡いヨコナ デ、ナデ	灰褐色	ヨコナデ ヨコナ方向のヘラケ ズリ	○	○		○			
59	37	B6	坂サ ブトレ	古墳	小甕	(10.8)			口縁部:ヨコナデ タテハケか?	淡褐色	口縁部:ヨコナデ ナデ、担圧後ナデ	○	○		○			頸部:工具痕あり
59	38	C5	VI層	古墳	甕	(18.0)	6.1		ヨコナデ、ナデ	淡黄褐色 淡褐色	ヨコナデ、ナデ	○	○		○			
59	39			古墳	甕	(18.8)	14.1		口縁部:ヨコナデ ハケメ後ナデ	暗褐色	口縁部:ヨコナデ ヘラケズリ	○	○		○			二次加熱あり
60	40	C5	VI層	弥生	高杯	22.4	4.1		ナデ、ヨコナデ後 ヘラミガキ	淡黄褐色	ヨコナデ	○	○		○			
60	41	B9		弥生→古墳	高杯		4.2		ヨコナデ	灰白色	ヨコナデ	○	○		○	○		外面:片盛りあり
60	42	C5		弥生	高杯				刺突文	黄褐色	ナデ	○	○					内面:片盛りあり
60	43	C5	VI層	弥生	高杯	4.4	4.3		ナデ後ヘラミガキ	淡黄褐色	ナデ	○	○					
60	44	B6	サブトレ	弥生か?	高杯				上面:指圧後ナデ タテ方向のナデ	暗茶褐色	しぼり痕	○	○		○			灰褐色
60	45		表土	弥生	高杯				上面:ナデ タテハケ(5本/cm)	淡褐色	指圧、指圧後横 方向のナデ、指圧後 脚部:シボリ、痕ナ デ	○	○		○	○		
60	46		VI層	弥生	高杯		4.2	9.9	ナデ、片盛り	赤赤褐色	杯底:ナデ、丹赤 部:シボリ、痕ナ デ	○	○					
60	47	南区	東壁	弥生	高杯		4.7		上面:ナデ ナデ、タテハケ(5 本/cm)後ナデ	淡白褐色	指圧とタテ方向の ナデ	○	○		○	○		
60	48	南区		弥生	高杯				タテハケメ	赤褐色	ヨコハケメ							
60	49	C10	SK1102	弥生終末→ 古墳初期	古墳系高杯				ナデ、ハケメ	褐色	ナデ、ハケメ	○		○	○			SK1001と同じか?
60	50	C8	表探土 層	古墳	高杯				罐部:ヨコナデ タテナデ	淡褐色	ヨコナデ	○	○					
61	51	C9	東壁 No.2	弥生	鉢	11.8	9.3	10.4	口縁部:ヨコナデ、 ナデ後タテハケ (11本/cm) ナデ後タテハケ(8 本/cm)	灰白色	口縁部:ヨコナデ ナデ	○	○		△			黒炭、打ち欠きあり
61	52	C8	表土	弥生→古墳	鉢				ナデのヘラミガキ	淡褐色	ナデのヘラミガキ	○	○					
61	53	B6	サブトレ	古墳	杯	(11.8)	(5.6)	4.7	口縁部:ヨコナデ 手持ちヘラケズリ 底面:ナデ	淡褐色	ナデ	○	○		○			
61	54	北区		古墳	杯	11.0			口縁部:ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	褐色	ヨコナデ	○			○			
61	55	B8	検出時	古墳	杯	13.8		5.9	ナデ	にぶい黄 褐色	ナデ	○	○		△	○		
61	56		VI層	古墳	杯	14.2		3.4	ヨコナデ、ナデ	淡褐色	ヨコナデ、ナデ	○	○					
61	57	B6	VI層	古墳	杯			3.3	ヨコナデ	にぶい黄 褐色	ヨコナデ	○	△		△			
61	58	C8	表探土 層	古墳	杯				口縁部:ヨコナデ ナデ	淡褐色	ナデ	○	○					
61	59	C5	包含層	古墳	杯	(15.8)		6.1	口縁部:ヨコナデ 底面:ナデ、ヨコハ ケ(6本/cm)、手持 ちのヘラケズリ	明褐色	口縁部:ヨコナデ 底面:ナデ	○	○					
61	60	B5	サブトレ	古墳	杯	10.6	4.6	3.4	口縁部:ヨコナデ 底面:ナデ ナデ、指圧後ナデ	明茶褐色	口縁部:ヨコナデ 工具によるナデ、 工具痕	○	○		○	○		口縁部打ち欠け か?

表24 藤原友田遺跡遺物観察表④(土器・陶磁器)

順 番 号	番 号	区 域	遺 跡 番 号	取 り 上 げ 番 号	時 期	器 種	法量 (cm) ()は復元径			外 観 の 文 様 ・ 調 色	内 面 の 文 様 ・ 調 色	胎土(○:多い、○ 含む、△:わず か、四角石、黒 石、赤土、 その他)				備 考
							口径	底部	器高			角四石	黒石	赤土	その他	
61	61	C5			古墳	ミニチュア土 器	3.0	2.3		ナデ、指圧	明黄褐色	ナデ、指圧	○	○	○	
61	62	C10	SK1102		弥生	器台	(11.2)			ナデ	にぶい 褐色	ナデ	○	○		SK1001と同じか?
61	63	B6 C6	VI層		弥生	器台	(13.9)			口縁部:ヨコナデ ナデ	淡褐色	口縁部:ヨコナデ ナデ	○	○		接合痕あり
61	64	B6	サブトレ		古墳	器台	(18.2)			指圧後ナデ	淡褐色 淡灰褐色	ヨコナデ、ヨコ方 向のヘラケズリ	○	○	○	
61	65	南区			弥生~古墳	山形系器台	17.9			ヨコナデ	にぶい 褐色	ヨコナデ、ケズリ	○		○	
61	66	C6			古墳?	壺?		3.9		格子目タタキ	暗灰色	ナナメハケメ(5本 /cm)	○	○	○	
62	67	B6	VI層		古墳	須恵器高杯		2.7		回転ヘラケズリ	灰白色	回転ヨコナデ	○	○	○	右回転のヘラケズ リ
62	68	C5			古墳	須恵器杯				回転ヨコナデ	淡青灰色	ナデ、回転ヨコナ デ			○	
62	69	C5	SH0064	Na.8	古墳	須恵器杯		0.8	1.5	回転ヘラケズリ、 ヨコナデ	青灰色	回転ヨコナデ、指 ナデ	○			
62	70	C5			古墳	須恵器杯				回転ヨコナデ	灰青白色	ナデ、回転ヨコナ デ	○	○	○	
62	71	北区			古墳	須恵器杯				回転ヨコナデ 底部:回転ヘラケ ズリ	灰色	回転ヨコナデ				
62	72	B6			古墳	須恵器高杯				回転ナデ	灰色	回転ナデ				
62	73	C5	包合層		古墳	須恵器高杯	(14.9)			口縁部:ヨコナデ 回転ナデ、回転ヘ ラケズリ	暗灰褐色	口縁部:ヨコナデ 回転ナデ			○	断面は4cm程度 か?
62	74	B6	VI層		奈良~平安	杯		1.5		回転ヨコナデ	灰白色	回転ヨコナデ			○	○
66	1	B8	SP1051		中世	小皿	7.2	7.4	1.6	回転ヨコナデ	褐色	回転ヨコナデ、指 ナデ	○	○	○	口縁部が少し偏っ ている
66	2	B9	SP1062		中世	小皿	8.2	6.7	1.8	回転ヨコナデ	褐色	回転ヨコナデ、ナ デ	○		○	
66	3	B9	SP1062		中世	小皿	8.0	7.0	1.7	回転ヨコナデ	褐色	回転ヨコナデ	○		○	
68	1	D2	SK0003	Na.1	中世	杯		5.8		回転ヨコナデ	にぶい 褐色	回転ヨコナデ		○	○	
70	1	C3	SK0022		中世	杯	12.6	9.0	3.0	回転ヨコナデ	淡黄褐色	回転ヨコナデ後指 ナデ	○	○	○	
70	2	C3	SK0022		中世	杯	12.8	8.8	3.1	回転ヨコナデ	淡褐色	回転ヨコナデ	○	○		断面:回転糸切り磨 し後破状態
70	3	C3	SK0022	Na.1	中世	杯	12.8	8.8	3.3	回転ヨコナデ	淡黄褐色	回転ヨコナデ後指 ナデ(一定方向)	○	○	○	断面:回転糸切り磨 し後破状態
70	4	C3	SK0022		中世	杯				回転ヨコナデ 底部:回転糸きり	褐色	指ナデ、回転ヨコ ナデ		○		断面:回転糸切り磨 し後破状態
70	5	C3	SK0022		中世	杯		8.0	2.2	回転ヨコナデ	淡褐色	回転ヨコナデ	○	○		断面:回転糸切り磨 し後破状態
70	6	C3	SK0022		中世	杯	(13.4)			ヨコナデ	黄褐色	ヨコナデ	○		○	
70	7	C3	SK0022		中世	小皿	(7.8)	(6.0)	0.9	回転ヨコナデ 底部:回転糸きり	淡黄褐色	回転ヨコナデ、指 ナデ	○		○	
70	8	C3	SK0022		中世	小皿				回転ヨコナデ 底部:回転糸きり	淡黄褐色	指ナデ、回転ヨコ ナデ	○		○	
70	9	C3	SK0022		中世	小皿				回転ヨコナデ 底部:回転糸きり	黄褐色	指ナデ、回転ヨコ ナデ	○		○	
70	10	C3	SK0022		中世	瓦器碗				ナデ	淡灰色	ナデ	○	○		

表25 藤原友田遺跡遺物観察表⑮(土器・陶磁器)

国 庫 番 号	番 号	区 域	遺 構	取り上 げ番号	時 期	筆 名	法量 (cm) () は単位付			外面の文様・調整	色	内面の文様・調整	胎土(○:多い、△:わずかに含む、□:石、灰、瓦、土、砂、その他)	備 考	
							口径	底部	高さ						
70	11	C3	SK0022		中世	土師質鍋				口縁部:ヨコナデ 指圧(不明)	淡黄褐色	ヨコハケメ	○ ○		
70	12	C3	SK0022		中世	瓦質鍋				格子目タタキ	褐色	ナデ	○		
70	13	C3	SK0022		中世	瓦質鍋				格子目タタキ	黒色にぶい褐色	ヘラケズリ	○		
72	1	C2	SK0151		古墳	須恵系甕				タタキ	淡茶灰色	タタキ(同心円)	○ ○		
72	2	C2	SK0151		中世	坏		6.0	1.6	回転ヨコナデ	淡褐色	回転ヨコナデ後指ナデ	○ ○	意面:回転糸切り し後板状痕	
74	1	B10	SK1110		中世	坏	(13.0)	(8.0)	4.5	回転ヨコナデ	褐色	回転ヨコナデ、ナデ	○	○	
74	2	B10	SK1110		中世	坏	(12.0)	(8.5)	4.0	回転ヨコナデ	にぶい黄褐色	回転ヨコナデ、ナデ	○	○	
74	3	C10	SK1110		11C~12C	白磁皿				施釉、黄釉	明オリ 灰色	施釉			
78	1	C5	SK0201	No.3	中世	坏	12.4	8.3	3.3	回転ヨコナデ、 回転糸切り	淡褐色	回転ヨコナデ、指ナデ	○ ○	○ ○	
78	2	C9	SK0201	No.2	中世	坏	12.5	8.5	3.7	回転ヨコナデ、 回転糸切り	淡褐色	回転ヨコナデ、指ナデ	○ ○	○	回転糸切り
78	3	C6	SK0201	No.3	中世	坏	10.5	8.2	5.0	回転ヨコナデ、 回転糸切り	淡褐色 褐色	回転ヨコナデ、指ナデ	○ ○	○ ○	
78	4	C6	SK0201	No.4	中世	坏	8.8	1.5		回転ヨコナデ、 回転糸切り、板状圧痕	淡黄褐色 灰色 褐色	回転ヨコナデ、指ナデ	○ ○	○	人為的打ち欠き
78	5	C5 SK0201 C6 SK0201	No.5	中世	坏		11.8	2.1		回転ヨコナデ	淡褐色	回転ヨコナデ	○ ○	○	
80	1	B9 SP0201		中世	小皿		(9.0)	(8.0)	9.0	回転ヨコナデ	褐色	回転ヨコナデ	○	○	
83	1	B9 SP1066 B9 SK1094		中世	小皿		(6.4)	(6.0)	1.2	回転ヨコナデ	褐色	回転ヨコナデ	○	○	
85	1	C9 SK1001		中世	坏		12.8	9.0	3.8	回転ヨコナデ	暗褐色	回転ヨコナデ後指ナデ	○ ○		
85	2	C9 SK1001		中世	坏		12.8	7.6	4.0	回転ヨコナデ	淡褐色	回転ヨコナデ後指ナデ	○ ○		
85	3	C9 SK1001		中世	坏		13.0	7.8	3.5	回転ヨコナデ	淡黄褐色	回転ヨコナデ	○ ○		
85	4	C9 SK1001		中世	坏		12.4	7.6	4.0	回転ヨコナデ	淡褐色	回転ヨコナデ後指ナデ(一定方向)	○ ○		
85	5	C10 SK1001		中世	坏		12.3	8.4	4.4	回転ヨコナデ	褐色	回転ヨコナデ	○	○	
85	6	C10 SK1001		中世	坏		(12.0)	(7.2)	4.0	底部:回転糸切り 回転ヨコナデ	褐色	回転ヨコナデ、ナデ	○ ○	○ ○	
85	7	C10 SK1001		中世	坏		(12.4)	8.4	4.0	回転ヨコナデ	にぶい赤褐色	回転ヨコナデ、ナデ	○ ○	○	
85	8	C10 SK1001		中世	坏		(12.3)	7.6	3.5	底部:回転糸切り 回転ヨコナデ	褐色	回転ヨコナデ、ナデ	○	○	
85	9	C10 SK1001		中世	坏		(12.3)	8.2	4.3	回転ヨコナデ、 指ナデ	褐色	回転ヨコナデ	○	○	
85	10	C9 SK1001		中世	坏		12.2	9.0	4.4	回転ヨコナデ	淡褐色	回転ヨコナデ	○ ○		
85	11	C9 SK1001		中世	坏		(12.4)	7.0	4.7	底部:回転糸切り、 板状圧痕、ヨコナデ	淡黄褐色	ヨコナデ、回転ナデ	○ ○	○ ○	
85	12	C10 SK1001		中世	坏					回転ヨコナデ	灰白色	回転ヨコナデ			
85	13	C10 SK1001		中世	坏					ヨコナデ	にぶい黄褐色	ヨコナデ	○ ○	○	

表26 藤原友道跡遺物観察表⑩(土器・陶磁器)

種別 番号	番 号	区 域	遺 構	取り上 げ番号	時 期	器 種	法量 (cm) () は底元径			外面の文様・調整 色 調	内面の文様・調整 色 調	胎土(○:多い, ○:含む, △:わずか)				備 考		
							口径	底径	器高			内面	底	口縁	胎土			
85	14	C10	SK1001		中世	坏				回転ヨコナデ	灰色	回転ヨコナデ	○	○	○			
85	15	C9	SK1001		中世	坏		7.0	2.3	底面:回転系切り、 底面圧痕、ヨコナ デ	淡褐色	ヨコナデ、指ナデ	○	○	○		人為的打欠きの可 能性あり	
85	16	C10	SK1001		中世	坏		8.6		底面:回転系切り 後縁状圧痕、 回転ヨコナデ	褐色	回転ヨコナデ、一 定方向のナデ	○	○	○	底面圧痕		
85	17	C9	SK1001		中世	坏		7.0	2.3	底面:回転系切り ヨコナデ	淡褐色	ヨコナデ、指ナデ	○	○	○			
85	18		SK1001		中世	坏		(8.0)	3.4	底面:回転系切り 回転ヨコナデ	淡褐色 灰色	回転ヨコナデ、指 ナデ	○	○	○		底面圧痕あり	
86	19	C9	SK1001		中世	坏		7.0	2.0	底面:回転系切り、 底面圧痕、ヨコナ デ	淡褐色	ヨコナデ、指ナデ	○	○	○			
86	20	C10	SK1001		中世	坏		(8.0)	2.5	底面:回転系切り 回転ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	回転ヨコナデ、回 転ナデ	○	○	○			
85	21	C10	SK1001		中世	坏		8.4		底面:回転系切り 回転ヨコナデ	褐色	回転ヨコナデ	○	○	○			
86	22	C9	SK1001		中世	坏		22.6	8.8	4.5	回転ヨコナデ	褐色	回転ヨコナデ	○	○			
86	23	C10	SK1001		中世	坏		(8.0)	2.7	底面:回転系切り 回転ヨコナデ	淡褐色	回転ヨコナデ、回 転ナデ	○	○	○			
85	24	C10	SK1001		中世	坏		7.9		底面:回転系切り 回転ヨコナデ	にぶい褐 色	回転ヨコナデ	○	○	○			
86	25	C10	SK1001		中世	坏		14.0	8.0	5.3	回転ヨコナデ	暗褐色	回転ヨコナデ	○	○			
86	26	C9	SK1001		中世	坏		(13.6)	9.6	4.1	底面:回転系切り 回転ヨコナデ	淡褐色 灰色	回転ヨコナデ、回 転ナデ	○	○	○	スス付着	
86	27		SK1001		中世	坏		(8.0)	2.7	底面:回転系切り 回転ヨコナデ	淡褐色	回転ヨコナデ、指 ナデ	○	○	○			
86	28	C10	SK1001		中世	坏		(8.0)	1.5	底面:回転系切り 回転ヨコナデ	淡黄褐色 暗褐色	回転ヨコナデ、指 ナデ	○	○	○	スス付着		
86	29	C10	SK1001		中世	小皿		(8.3)	(7.2)	1.0	底面:回転系切り 回転ヨコナデ	褐色	回転ヨコナデ、ナ デ	○	○	○		
86	30	C10	SK1001		中世	白磁玉縁碗					施釉	灰白色	施釉				黒色 の 底 面	
86	31	C10	SK1001		中世	白磁玉縁碗		(7.4)	2.4	底面:底跡、底面 タテハゲ(6本/cm)	灰白色	施釉					黒色 の 底 面	
86	32	C10	SK1001		中世	瓦器碗				回転ヨコナデ	にぶい黄 褐色	回転ヨコナデ	○					
86	33	C9	SK1001		中世	東遷系鉢			8.4	ヨコナデ	灰色	ナデ			○	内面:剥落が激しい		
86	34	C9	SK1001		中世	燗台		4.6	5.4	ヨコナデ	淡黄色	ナデ	○	○		底面:回転系切り		
86	35		SK1001		中世	燗台		(8.0)	3.1	底面:回転系切り 回転ヨコナデ、ナ デ	淡褐色	回転ヨコナデ、指 ナデ	○	○	○			
88	1	B6	SK0078		中世	小皿		8.4	7.0	1.2	回転ヨコナデ	淡赤褐色	回転ヨコナデ後部 ナデ	○	○		口縁部にスス付着	
90	1	B9	SP1112		中世	坏		(14.4)	(10.0)	4.7	回転ヨコナデ	褐色	回転ヨコナデ	○	○		底面圧痕	
92	1	D2	SP0180		中世	瓦器碗					回転ヨコナデ	淡灰白色	不定方向のナデ	○	○			
94	1	C2	SP0159		中世	瓦質鉢					ヨコナデ	淡黄白色	ヨコナデ	○	○			
96	1	D2	SP0177		中世	土師質壺					ヨコナデ	淡褐色	ヨコナデ	○	○		底面	
98	1	D4	SP0042		中世	小皿		7.4	5.8	1.6	回転ヨコナデ	淡褐色	回転ヨコナデ	○	○		底に黒痕あり	

表27 藤原友田遺跡遺物観察表①(土器・陶磁器)

探 査 番 号	番 号	区 域	遺 構 の 番 号	取 り 上 げ 番 号	時 期	器 種	法 量 (cm) () は復元径			外面の文様・調整	色 調	内面の文様・調整	胎土(○:多い、○:含む、△:わずかな) 陶石 灰石 石英 赤土 黒土 黄土 その他						備 考
							口径	底部	器高										
100	1	D2	SP0061		中世	瓦質壺				ナデ	淡灰褐色	ナデ	○	○					
102	1	C5	SP0104		中世	瓦質壺				指圧後不定方向のナデ	淡灰褐色	指圧後タテ方向のナデ	○	○			○		
104	1	B9	SP1107		中世	燗台		6.8	6.2	回転ヨコナデ、ナデ	にぶい橙		○	○	○				
106	1	C8	SP1034		中世	瓦質片口鉢				ナデ	黒灰色	ナデ、ナナメハケメ	○		○				
107	1	B9	SD1002		中世	坏	14.0	9.0	3.8	回転ヨコナデ、回転糸切り後板状痕	暗茶褐色	回転ヨコナデ、指ナデ	○	○	○	○			
107	2	B6	サブトレ		中世	坏	(13.5)	(9.2)	5.0	口縁部:回転ヨコナデ、底部:回転糸きり磨し痕、回転ナデ、未調整	明橙褐色	回転ナデ、指ナデ	○	○	○	○			
107	3	B9	SD1002		中世	坏	13.0	9.8	3.7	回転ヨコナデ	橙褐色	回転横ナデ	○	○	○				底面:回転糸きり
107	4	B2			中世	坏	11.6	9.6	3.1	回転ヨコナデ 底部:回転糸きり	にぶい橙 色	回転ヨコナデ、指ナデ						黒色字	
107	5	C5	VI層		中世	坏				回転ヨコナデ	淡褐色	回転ヨコナデ	○	○					
107	6	C6	VI層		中世	坏	9.0	1.3		底部:回転糸切り 回転ヨコナデ	淡橙褐色	回転ナデ	○	○	○				
107	7		VI層		中世	坏	9.0	2.0		ヨコナデ	淡黄色	ヨコナデ、ナデ	○						
107	8	B9	SD1002		中世	坏	14.0	9.0	3.8	回転ヨコナデ、回転糸切痕	淡褐色	回転ヨコナデ、指ナデ	○	○	○	○			二次加熱
107	9	B5	サブトレ		中世	坏	9.1			底部:回転糸きり 磨し痕、ナデ	淡褐色 暗灰褐色	ナデ	○	○					
107	10		SD1002		中世	坏	8.4			回転ヨコナデ、回転糸切痕	淡褐色	回転ヨコナデ、指ナデ	○	○	○	○			S-1002 横の溝から出土
107	11	C2	SD0001		中世	坏	(6.0)			回転ヨコナデ	淡黄白色	回転ヨコナデ	○	○					
107	12	C6	VI層		中世	坏	8.0	1.5		底部:回転糸切り 回転ヨコナデ	淡橙褐色	回転ヨコナデ、指ナデ	○	○	○	○			剥落が激しい
107	13	B9	SD1002		中世	坏	8.8			回転ヨコナデ、回転糸切痕	淡褐色	回転ヨコナデ	○	○	○	○			
107	14	B9	SD1002		中世	坏	8.0			回転ヨコナデ、回転糸きり	淡褐色	回転ヨコナデ、指ナデ	○	○	○	○			
107	15	B6	サブトレ		中世	小皿	(7.5)	(5.8)	2.1	回転ヨコナデ、底部:回転糸きり	淡明褐色	やや激しいナデ、ナデ	○	○	○	○			
107	16	C5	VI層		中世	小皿	6.0	1.2		回転ヨコナデ	茶褐色	回転ヨコナデ後指ナデ	○	○					底面:回転糸切り後板状痕
107	17	C9	SD1004		中世	小皿	7.0	6.4	1.2	回転糸切り、回転ヨコナデ	にぶい橙 色	回転ヨコナデ、ナデ				○	○		
107	18	C5 ベルト C6 ベルト			中世	小皿	(7.7)	(7.6)	0.9	口縁部:ヨコナデ 底部:回転糸きり	淡褐色	口縁部:ヨコナデ ナデ	○	○	○	○			
107	19	B9	SD1002		中世	小皿	6.8	5.0	1.1	回転ヨコナデ	橙褐色	回転ヨコナデ、回転糸切り	○	○	○	○			
107	20	B6	VI層		中世	小皿	9.2	7.4	1.0	回転ヨコナデ	にぶい橙	回転糸きり	○	○	○	○			
107	21	C2	SD0001		中世	小皿				回転ヨコナデ、回転糸切り痕	淡褐色	回転ヨコナデ	○	○		○			
107	22	南区			中世	小皿	8.2	5.2	2.2	回転ヨコナデ 底部:回転糸きり	橙褐色	指ナデ、回転ヨコナデ	○	○					
107	23	北区			中世	小皿	5.6			摩滅している、底部:回転糸きり	淡橙褐色	摩滅している	○	○					
107	24	C9	SD1004		中世	豊前原瓦器碗				丁寧なヨコナデ	灰色	丁寧なヨコナデ	○	○		○			

表28 藤原友田遺跡遺物観察表⑱ (土器・陶磁器)

探 検 番 号	区 域	遺 構	取り上 げ番号	時 期	器 種	法量 (cm) () は復元径			外面の文様・調整	色 調	内面の文様・調整	胎土(●:多い, ○:含む, △:わずか)				備 考
						口径	底部	器高				角四石	長石	黒砂子	その他	
107	25	C6	VI層	中世	東国東型瓦器	4.0	2.9		ナデ、無調整	暗灰色	ナデ	○	○	○		
107	26	C6	VI層	中世	東国東型瓦器	6.0	1.2		ナデ、無調整	灰白色	ナデ	○	○	○		
107	27	C6	VI層	中世	東国東型瓦器		1.2		ナデ	灰白色	ナデ					黒色砂子
107	28	C6	VI層	中世	東国東型瓦器		1.1		ナデ	灰白色	ナデ	○				黒色砂子
107	29	C6	VI層	中世	東国東型瓦器		1.2		ナデ、無調整	淡黄褐色にぶい 褐色	ナデ					黒色砂子
107	30	B6	VI層	中世	東国東型瓦器	6.4	1.7		回転ヨコナデ	灰白色	回転糸きり	●	●	○		
107	31	B6	VI層	中世	東国東型瓦器		1.6		回転ヨコナデ、ヨ コナデ	灰色	ナデ	●		●		
107	32	南区		中世	東国東型瓦器				ヨコナデ、ナデ	灰褐色	ナデ					黒色砂子
107	33	C5	CEベルト	中世	土師質鉢				ナデ、指圧	明褐色	ヨコハケ(9本/cm)、 ナデ	△				
107	34	C6	VI層	中世	土師質鉢		3.9		ナデ	淡褐色	ナデ、カキ目	○	○	△	○	
107	35	B6	VI層	中世	東播系鉢		3.5		回転ヨコナデ	黒灰色 灰白色	回転ヨコナデ			●	●	自然釉付着
107	36	B6	VI層	中世	東播系鉢		4.7		回転ヨコナデ	黒灰色 灰白色	回転ヨコナデ			●	●	自然釉付着
107	37	C6	VI層	中世	東播系鉢		2.7		底部：未調整 ナデ	淡褐色	ナデ	○	○			
107	38	B6	VI層	中世	須恵質鉢				口縁部：ヨコナデ 未調整	灰黄色	ナナメ方向のハケ メ(9本/cm)		○	○		焼成：やや不良
107	39	D2		中世	瓦質鉢				ヨコナデ	黒褐色	ヨコナデ	○				
107	40	B9	SD1002	中世	瓦質鉢	21.2	5.1		ヨコハケメ	暗灰色	ヨコハケメ	○	○			
107	41	B6	VI層	中世	瓦質罌鉢				ナデ	浅黄色 浅褐色	すり目	○		○		黒色砂子
107	42	C6	VI層	中世	瓦質罌鉢		2.9		底部：板状圧 ナデ	にぶい黄 褐色	ナデ、カキ目	○	○	△	○	
108	43		VI層	中世	瓦質罌鉢				ナデ、ヨコナデ	暗灰褐色	ヨコハケ、ヨコナ デ	○	△		△	
108	44	B6	VI層	中世	瓦質罌鉢		3.4		ヨコナデ、ナデ	にぶい黄 褐色	ヨコナデ		○	○		二次加熱あり
108	45	C6	VI層	中世	土師罌鉢		2.0		ヨコナデ	褐色	ヨコナデ	●	●		●	
108	46	D2		中世	瓦質火鉢				ヨコナデ	明褐色	ハケメ	○				外面に菊花文
108	47			16C 後半	備前罌鉢	27.0	14.0	11.6	底部：未調整 クロコナデ、ナデ	にぶい黄 褐色	クロコナデ、すり 目(1単位につき7 本が10ヶ所)					黒色砂子
108	48		VI層	中世	備前罌				ヨコ方向・タテ方 向のヘラケズリ	暗赤茶褐 色	ヨコハケ、ヨコナ デ		△		△	
108	49	B6	VI層	12C～13C	同安楽系青磁 碗				施釉	明緑灰色	施釉					
108	50	D2		12C～13C	同安楽系青磁 碗				施釉	灰緑色	施釉					
108	51	B6	サブト レ	12C～13C	同安楽系青磁 碗				施釉	うす緑つ ばい透明 釉	施釉					外面：一部カキ目
108	52	B9		12C～13C	同安楽系青磁 碗		2.0		施釉	明緑灰色	施釉					

表29 藤原友田遺跡遺物観察表⑨(土器・陶磁器)

押 図 番 号	番 号	区 域	遺 構	取り上 げ番号	時 期	器 種	法量 (cm) () は復元径			外面の文様・調整	色 調	内面の文様・調整	胎土(○:多い、○:含む、△:わずかに含む)				備 考
							口径	底径	器高				青 灰 石	灰 石	赤 色 粘 土	黒 色 粘 土	
108	53	B9			12C ~ 13C	同安黒系青磁碗			2.3	施釉	明緑灰色	施釉					
108	54	B6	VI層		12C ~ 13C	同安黒系青磁碗				施釉	明緑灰色	施釉					
108	55	D2			中世					施釉	淡灰緑色	施釉					
108	56	B6	VI層		中世	白磁玉縁碗		7.5	1.8	施釉	灰白色	施釉					
108	57	C5	VI層		中世	白磁玉縁碗	(15.0)		1.9	施釉	灰白色	施釉					
108	58	C5	VI層		中世	白磁玉縁碗		(6.4)	2.3	露胎	淡黄褐色	施釉					黒色 粘土
108	59	南区			中世	白磁玉縁碗		8.5		底部:同軸ナデ無胎。ヨコヘラナデか?	灰白色	施釉					
108	60	C6			中世	白磁小皿	(9.0)		1.1	施釉	灰白色	施釉					黒色 粘土
108	61	B8			中世	白磁小皿				施釉	灰白色	施釉					近世か?
108	62	B6	VI層		近世	唐津系陶器 溝縁皿			1.3	施釉 (灰釉)	灰色	施釉 (灰釉)					
108	63	B8	検出時		17C 末~ 18C 前半	陶胎染付碗	3.8	2.0		施釉、露胎、貫入	オリーブ 灰色	施釉、貫入					
108	64	北区			近世	瀬戸美濃焼	3.2			底部:同軸糸きり 痕、透明釉、施釉	灰緑色	施釉					内外ともにロクロ 目あり
108	65	南区			近世	陶器把手				鉄釉	褐色	鉄釉					器種・産地不明

表30 藤原友田遺跡遺物観察表② (石器)

押 番 号	番 号	区 域	遺構・層位	取り上げ 番 号	時 期	器 種	数量※ () は復元径				材 質	備 考
							縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
10	31	C2	S0001				3.2	2.0	0.5	2.7		
10	32	D2	S0001				4.3	3.4	0.9	15.2	安山岩	二次加工
10	33	D2	S0001			砥石か?	3.8	3.2	0.9	16.7		上側下側欠損
36	12	C6	S0058 竈	No. 1		台石	24.8	25	6.8			灰色
36	13	C6	S0058	No. 14		台石	31.4	22.6	8.2		安山岩	
63	75	D2	S0003				2.2	1.7	0.5	1.6	姫路産黒曜石	
63	76	B6	包含層				2.9	2.1	0.9	5.4	姫路産黒曜石	
63	77	B8					2.2	2.3	1.6	7.7	姫路産黒曜石	
63	78		S1002 ココの溝				3	1.9	1.6	5.8	姫路産黒曜石	
63	79	C5				石斧	6.8	5.2	0.7	30.4		
63	80		S1001				5.2	3.0	0.6	15.7	結晶片岩	
63	81	C6	S0201	No. 1		磨製石剣か?	4.2	3.0	6.5	11.4	結晶片岩青石	
63	82	C9	S1004			凹石	10.6	12.7	7.8	1162	安山岩	
63	83	南区	包含層				8.3	6.7	4.7	296.8	凝灰岩	3面に窪みあり
63	84						16.9	8.3	1.6	221.8	凝灰岩	

表31 藤原友田遺跡遺物観察表② (鉄製品)

押 番 号	番 号	区 域	遺構・層位	取り上げ 番 号	時 期	器 種	数量※ () は復元径				材 質	備 考
							縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
63	85	C5	包含層			刀子	7.1	1.8	1.1	13.0		
63	86	C5	包含層			釘か?	6.2	1.8	1.3	35.1		

表32 藤原友田遺跡遺物観察表② (木製品)

押 番 号	番 号	区 域	遺構・層位	取り上げ 番 号	時 期	器 種	数量※ () は復元径				材 質	備 考
							縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
74	4	B10	S1110			枕か?	9.7	4.0	3.5			
74	5	B10	S1110			枕か?	6.6	3.7	2.8			
74	6	B10	S1110			木器	18	2.0	1.9			

表33 カネノトイ遺跡 1 次調査遺物観察表 (土器・陶磁器)

図 版 番 号	押 番 号	写 真 図 版	遺構名	種 類	器 形	生産地	法 量 (cm)			備 考
							長 さ	幅	厚 さ	
134	1	41-1	SH060	土師器	甕					
134	2	41-2	SH060	土師器	甕					
134	3		SH060	土師器	甕					
136	1	41-3	SK040	土師質土器	坏	14.4	9.5	4.2		
142	1	41-4	SP022	弥生土器	甕					
142	2	41-5	SP024	土師器	甕					
142	3	41-6	SP043	瓦質土器	鉢					
143	1	41-7	包含層	弥生土器	甕					
143	2	41-8	包含層	弥生土器	甕					
143	3	41-9	包含層	縄文土器	深鉢					
143	4		包含層	土師器	甕					
143	5	41-10	包含層	縄文土器	鉢					
143	6	41-11	包含層	縄文土器	鉢					

表34 カネノトイ遺跡2次調査遺物観察表①(瓦)

図版 番号	押印 番号	写真 図版	遺構名	種類	形状	生産地	法 量 (cm)			備 考
							長 さ	幅	厚 さ	
148	5		SD089	瓦	軒平瓦					唐草文
148	6	48-7	SD089	瓦	軒丸瓦					左巻き三巴文と珠文
151	1	48-13	SD002	瓦	鯉瓦					尾鰭
151	2	48-14	SD002	瓦	鯉瓦					尾鰭
151	3	49-1	SD002	瓦	鯉瓦					
151	4	49-2	SD002	瓦	鯉瓦?					
151	5	49-4	SD002	瓦	鬼板?					
152	1	49-3	SD002	瓦	軒丸瓦					
152	2		SD002	瓦	丸瓦					
152	3	49-5	SD002	瓦	軒平瓦					唐草文
152	4	49-6	SD002	瓦	軒平瓦					唐草文
152	5		SD002	瓦	道具瓦					
152	6	49-7	SD002	瓦	道具瓦					
152	7		SD002	瓦	軒平瓦					
153	1	49-8	SD002	瓦	丸瓦		14.0			凸面にナデ、凹面にコビキ痕の上に布目痕と吊り紐痕
153	2		SD002	瓦	丸瓦					凸面にナデ、凹面に布目痕
153	3	49-9	SD002	瓦	丸瓦					凸面にナデ、凹面にコビキ痕の上に吊り紐痕
153	4		SD002	瓦	丸瓦					凸面にナデ、凹面に布目痕
153	5		SD002	瓦	丸瓦					凸面にナデ、凹面にコビキ痕の上に布目痕
154	7		SD001	瓦	丸瓦					凸面に縦方向の篋状工具によるナデ、凹面に吊り紐痕及び布目
154	8		SD001	瓦	平瓦					凸面にナデ、凹面に篋状工具によるナデ
154	9	49-12	SD001	瓦	鬼板?					表面にナデ、裏面にヘラケズリ
154	10	49-13	SD001	瓦	鯉瓦					穿孔された耳および駒輪と耳の周囲には竹管文による鱗が表現される
157	1		SK003	瓦	平瓦				1.6	凹凸面ともヘラ状工具によるナデ
157	2		SK003	瓦	平瓦				1.6	
157	3		SK003	瓦	丸瓦				1.2	凸面にナデ、凹面にコビキ痕の上に布目痕と吊り紐痕
157	4		SK003	瓦	丸瓦				1.8	凸面にナデ、凹面に布目痕
157	5		SK003	瓦	丸瓦				1.8	凸面にナデ、凹面にコビキ痕
157	6		SK003	瓦	丸瓦				2.5	凸面にヘラ状工具によるナデ、凹面にコビキ痕の上に布目痕
157	7	50-1	SK003	瓦	鯉瓦?					下腹?
159	1	50-2	SK090	瓦	丸瓦		15.2		2.0	凸面に縦方向のナデの単位、凹面にコビキ痕の上に布目痕と吊り紐痕
159	2		SK090	瓦	平瓦				2.0	凹面に横方向のナデ、凸面に縦方向のナデ
160	1		SK090	瓦	平瓦				2.0	凹面に横方向のナデ、凸面に縦方向のナデ
160	2		SK090	瓦	平瓦	28.4	25.0		2.0	凹面に横方向のナデ、凸面に縦方向のナデ
161	1	50-5	SK091	瓦	鬼瓦?				3.2	巻毛部分?、各面ともナデ
161	2		SK091	瓦	丸瓦				1.6	玉縁、凸面にナデ、凹面にはコビキ痕の上に布目痕と吊り紐痕
161	3		SK091	瓦	丸瓦				1.4	凸面には縦方向にナデ、凹面にコビキ痕
161	4		SK091	瓦	丸瓦				2.0	凸面に縦方向のナデの単位、凹面にコビキ痕の上に布目痕と吊り紐痕
161	5	50-4	SK091	瓦	平瓦	33.6	26.8		2.4	凹凸面にナデ
165	2		SP064	瓦	塼					表面はナデ
169	1		遺構外	瓦	平瓦					凹面は縦方向のナデ、凸面は横方向のナデ
169	2		遺構外	瓦	軒平瓦					凹面にナデおよびコビキ痕
169	3	52-10	遺構外	瓦	軒平瓦					
169	4	52-11	遺構外	瓦	鯉瓦					円環による鱗の表現と鱗の一部
169	5	52-12	遺構外	瓦	軒丸瓦					凸面にナデ、凹面にコビキ痕の上から吊り紐痕・布目痕
169	6		遺構外	瓦	軒丸瓦					
169	7	52-13	遺構外	瓦	軒丸瓦					
169	8		遺構外	瓦	軒丸瓦					
169	9	52-14	遺構外	瓦	軒丸瓦		13.5			疤痕あり
170	1		遺構外	瓦	丸瓦		12.8			凸面にナデ、凹面にコビキ痕の上から布目痕
170	2		遺構外	瓦	丸瓦					凸面にナデ、凹面にコビキ痕の上から布目痕
170	3		遺構外	瓦	丸瓦					凸面にナデ、凹面にコビキ痕の上から布目痕・吊り紐痕、釘穴・凹坑
170	4		遺構外	瓦	丸瓦					凸面にナデ、凹面にコビキ痕の上から吊り紐痕、釘穴・凹坑
170	5		遺構外	瓦	丸瓦					凸面にナデ、凹面にコビキ痕の上から布目痕・吊り紐痕

表35 カネノトイ遺跡2次調査遺物観察表②(土器・陶磁器)

図版 番号	挿入 番号	写真 図版	遺構名	種 類	器 形	生産地	法 量 (cm) は復元径			備 考
							長 さ	幅	厚 さ	
146	1	48-1	SD088	瓦質土器	火鉢					
146	2	48-2	SD088	須恵器	甕					古墳時代
148	1	48-3	SD089	土師質土器	鍋					
148	2	48-4	SD089	磁器	皿		(14.3)			
148	3	48-5	SD089	磁器	碗	肥前	(13.0)			青磁染付。18世紀末
148	4	48-6	SD089	弥生土器	高坏			(17.0)		内外面に赤色顔料を塗布
150	1		SD002	陶器	碗			(5.4)		
150	2	48-8	SD002	陶器	碗	唐津		(4.8)		17世紀?
150	3	48-9	SD002	磁器	碗	伊万里		(4.2)		初期伊万里。1630～1650年
150	4		SD002	磁器	碗	朝鮮		(6.2)		16世紀後半～17世紀初頭。破損面に漆継ぎを行う。
150	5	48-10	SD002	土師器	高坏					外面に赤色顔料を塗布
150	6	48-11	SD002	陶器	鉢	唐津		(8.0)		17世紀前半
150	7	48-12	SD002	陶器	壺	中国南部				16世紀後半～17世紀前半
150	8		SD002	瓦質土器	鉢			(15.0)		
154	1	49-10	SD001	磁器	碗	肥前	(10.3)			1630～1660年
154	2	49-11	SD001	磁器	湯子碗	京極鎮		(5.2)		
154	3		SD001	陶器	壺?	唐津		(12.0)		17世紀前半
154	4		SD001	瓦質土器	片口鉢					
154	5		SD001	瓦質土器	鉢		(23.4)	(19.4)	(4.0)	
154	6		SD001	瓦質土器	鉢		(39.8)	(27.4)	(10.8)	
156			SD003	瓦質土器	鉢		(37.8)	(28.0)	(12.3)	
159	3	50-3	SK090	陶器	碗	唐津焼		(5.1)		土灰胎。1590～1610年
165	1		SP056	土師質土器						内面にヨコナデ、外面にナデ
166	1	51-1	遺構外	縄文時代	深鉢					
166	2	51-2	遺構外	弥生土器	壺					
166	3	51-3	遺構外	弥生土器	壺					上面に円形浮文を貼り付け、口唇部に鋭歯状のキザミ目
166	4	51-4	遺構外	土師質土器	甕					
168	1	51-5	遺構外	青磁	碗	龍泉窯				
168	2	51-6	遺構外	陶器	天目茶碗	瀬戸英濃	(12.0)			
168	3	51-7	遺構外	土師質土器	碗			5.1		内面及び見込み部にナデ、外面腰部は回転ヘラケズリ
168	4	51-8	遺構外	磁器	碗			(4.1)		
168	5	51-9	遺構外	陶器	小杯	唐津		(3.4)		
168	6	51-10	遺構外	青磁	筒形花生又は香炉			(6.0)		
168	7	51-11	遺構外	磁器	皿	肥前		(6.1)		18世紀
168	8	51-12	遺構外	磁器	皿			(4.5)		見込みに蛇目輪割ぎ
168	9		遺構外	白磁	皿		(7.4)	(3.9)	(2.5)	
168	10	51-13	遺構外	陶器	碗			(5.0)		陶胎染付碗。18世紀前半
168	11	51-14	遺構外	磁器	碗	肥前	(8.6)	(3.6)	5.0	18世紀
168	12	51-15	遺構外	陶器	土瓶		(7.6)			関西系陶器。18世紀後半～19世紀
168	13	52-1	遺構外	陶器	急須				(8.4)	底部外面に「火情諸合」のスタンプ。関西系陶器。18世紀後半～19世紀
168	14	52-2	遺構外	陶器	鉢	唐津	(29.6)			18世紀前半
168	15	52-3	遺構外	磁器	段重	肥前	(10.6)			18世紀以降
168	16	52-4	遺構外	陶器	甕鉢	備前				
168	17	52-5	遺構外	陶器	甕鉢	備前				
168	18	52-6	遺構外	陶器	甕鉢	備前				
168	19		遺構外	瓦質土器	鉢					
168	20	52-7	遺構外	陶器	甕鉢	備前				
168	21		遺構外	土師質土器	坏					
168	22		遺構外	土師質土器	鉢					
168	23		遺構外	瓦質土器	鉢					
168	24		遺構外	陶磁器	碗					
168	25		遺構外	瓦質土器	鉢			(15.0)		
168	26	52-8	遺構外	瓦質土器	火鉢					脚部
168	27	52-9	遺構外	瓦質土器	十能の柄					

表36 カネノトイ遺跡2次調査遺物観察表③(石)

図版 番号	挿入 番号	写真 図版	遺構名	種 類	器 形	生産地	法 量 (cm)			備 考
							長 さ	幅	厚 さ	
171			遺構外	石臼	上臼		35.0	9.0		磨り目5本6区画